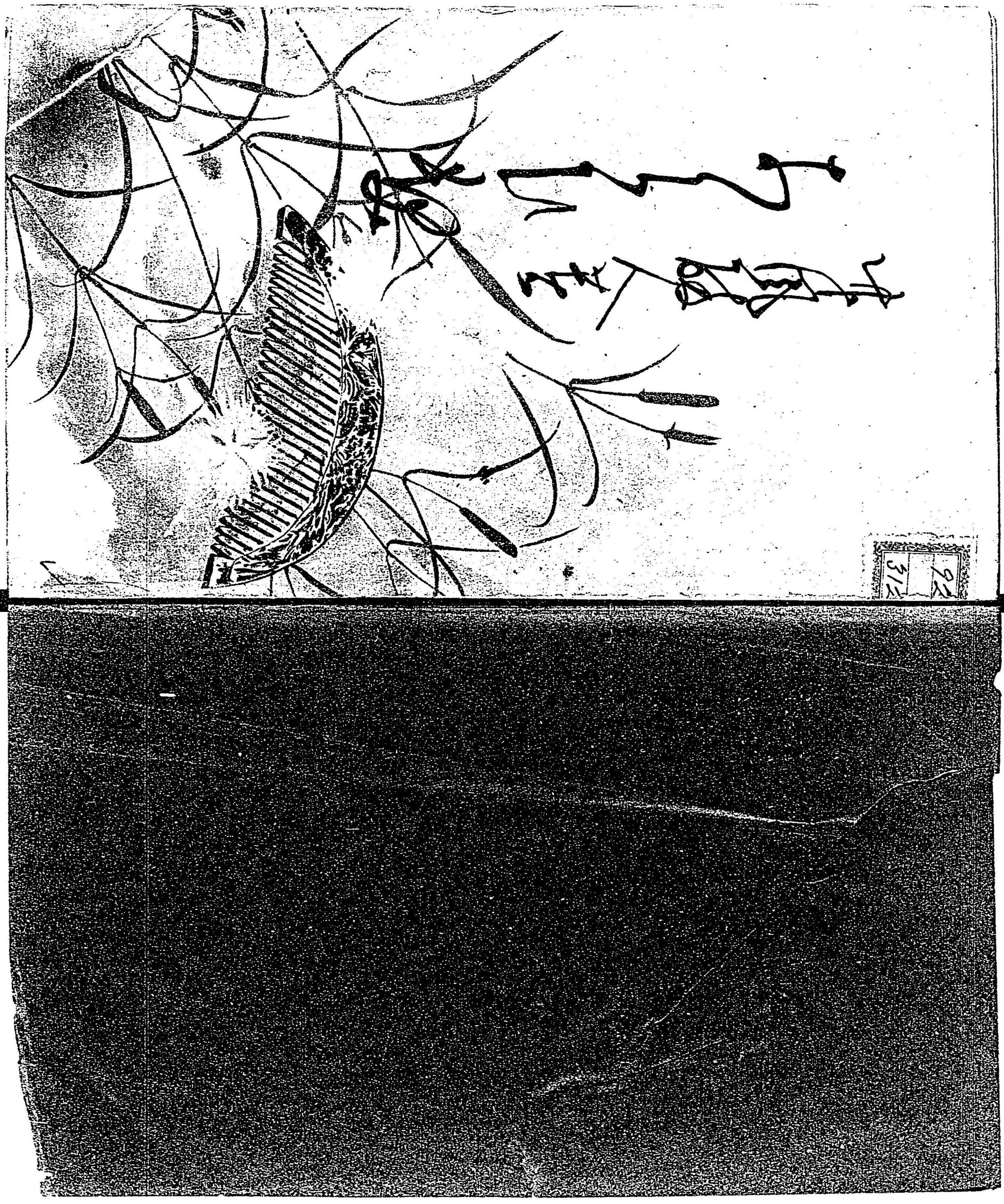
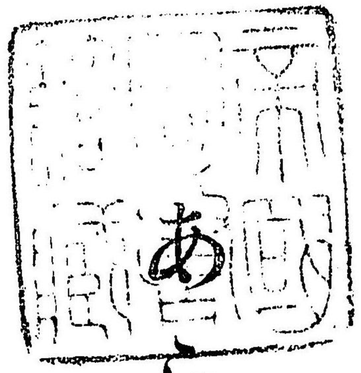




あらひ髪

竹風醉人

叙

昔人の曰へる詩人之詩、書家之書、畫工之畫を喜ばずとは、其の匠氣の傷ふ所有ればなり。予近來文を作る毎に、頗る此氣の紛紛たるを覺えて、亦自ら憎むこと甚し。輙ち稿を束ね、硯を覆ひ、暫く去りて眞趣純乎の者を世間に求むるに、却りて、得る所は、比々として稚氣有る者、衒氣有る者、俗氣有る者、慢氣

有る者、村氣有る者、邪氣有る者ならざる莫し。此に於て、予輩が匠氣の者こ雖も、未だ卒に棄つべからざるを思ひ、又様に依りて千百の胡蘆を畫き、徒に美酒内に涌くの萬一を徼倖するのみ。箇の匠氣轉た盛に、他の濫作益急なる時に方りて、登張文學士會ま其の瑰壯の氣を抑へ、峭健の手を柔げて、一篇の恨史半夜の幽感に成り、情致の纒緜を寫

すに詞華の婉麗を極め、題してあらひ髪と曰ふ。予の之を聞くや愕然として、知らず、秀才何の故に此戯を作す乎。後自ら慶して意へらく、是予の久しく求むる所に應ずる者ならざらんや。既に匠筆の巧有りて、又必ず眞趣の純を存する者、予尤も之を珍重せんとす。刻成るの日直ちに三誦して、滿案の匠氣を去るを得ば、何の幸か之に如かん、何の

快か之に過ぎん。

明治卅五年上秋、紅葉山人題于猶眠山閣、

時新凉如水、病胃初爽。

序

色即是空、空即眞如、悟るは野暮の骨頂にして、迷ひは三界の世相なるべし。そもや當世島田の井筒油くさく、英吉利結びの薔薇の香ときめくよりは、洗ひ髪に有松絞のはて姿、洽く諸人に色道の功德を施し、一切の衆生を迷ひの海底深きに導くこと聞くこそ何ぼう有がたからずや。見ねば逢ひたし、逢へ

ば迷ふ。あれさ、ぢれつたいねと叱られしと
云爾。

明治三十五年夏一日東京に於て

ふたらの山人　臨風しるす

おかへし

まなむすめ、一人まうけ、あらひ髪と名告らせ給へりしとや。やがて來む有松絞の立ち姿、如何ばかり世の咀ひの標的にやなり給はむかと、妬しき限りにこそ。斯くて、おあづかり申せしニイチエの君、こたび兄上にならせ給ひつるよな。誰知らぬものなき腕白者こて、懲らしめの線香茶碗は物かは、今は

なかく に同僚の手にも餘りぬれば、親元へ返してむなど耳うち聞かぬにはあらねど、聊かもろこしの文にもまなこさらせし身の、さる淺墓なる振舞得こそ忍ばれ、詩聖生立のことはりを蝦茶式に述べつることも侍りぬ。兎も角もお心やすう思召せ。引きかへてべエコンの翁の讖言につまさるゝは吾身に侍り。露いさゝかもさる氣色だに

なく、偶々生るゝは肉の子ばかり。男もあり女もあれど、善魔さまの題辭の如く、役者たるべき容もなく藝者たるべき姿もなければ、親馬鹿風鈴の音色冷しき今日此頃、何の糸瓜の棚下に、頭を撫でつ帶を摩りつ、心欲貴前望天才身欲正後顧常識と一家ばかりの實語教を復習せ侍りつ。不得止也。論ふ君の作る君に旅立つを餞すとて、たまく 繙

けゐ歌の一ふし、斯くなむ。

"—— seeks the storm
As though the storm contained repose."

葉月はじめ　　芥　ふね子

……(〇一)……

序

かの髪上げし女房のぬやゝしき、君が常なる筆つきを、ことさらに解きほどきたるや、この物語なるべき。いで、香ある脂に取り上げしが、一筋だに亂だるゝことなきは、さるかたにうるはしかれど、艶にあえかなる洗ひ髪、すそさはらかにうちまかせたらんなつかしさは、心ゆくものゝかぎりなれや。

……(一一)……

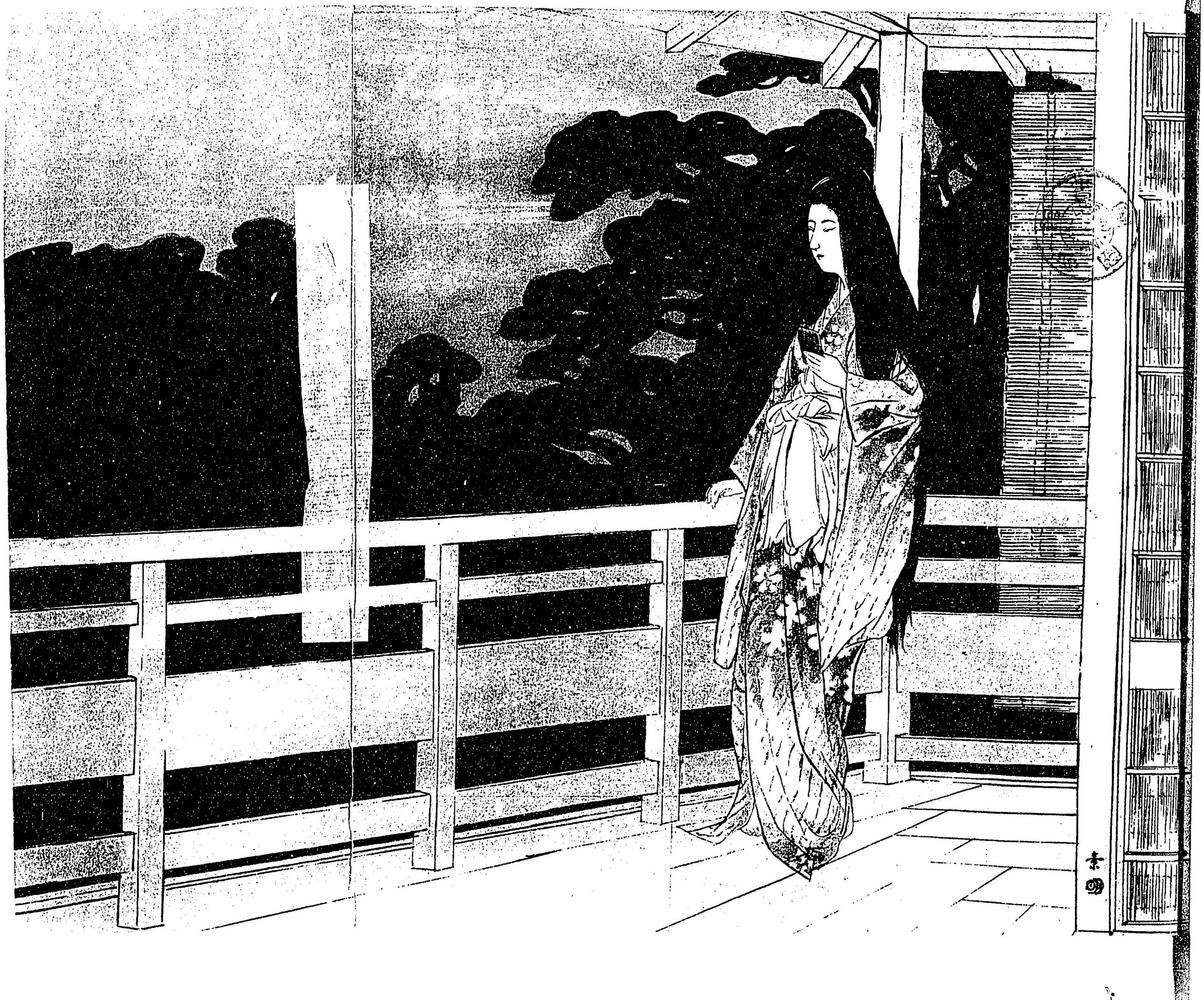
あらず〳〵、現し世の塵埃洗ひ去りて、粉黛さながら跡をとめず、清らにうちあがりたらん姿こそげにしくものもなかりけれ。この艶なるとこの清きと、やがてこの文の姿ならずや。

佐々醒雪

叙

美女は命を斷つ斧といへり。そざま故にの亂れ髪、といてほどいてむすぼゝれたる、その思をも流したるを、むすびあげたる竹葉の一滴、やがてこの多恨の文字を成せしなるべし。あらひ髪一篇、何ぞ我友をして薄倖の名を擅にせしむ。危いかな〳〵。

廿五年新秋　平田禿木



あらひ髪

竹風醉人

その一

青山といへば、都にての名高き名所、さるやんごとなき御方々の、ましますところと聞くに、たゞかたじけなさに涙こぼれて、勿体なき心地、堪へ難うも覺ゆるを、思へばこれも浮世や、人の子の、貴き賤き、百年の形體を、保つべきいはれもなければ、泣いて笑ふて醒めて醉ふて、夢のやうに一生を送りてのち、やがては、厭々ながらも、長への眠につけるときの、身の置き所も、こゝなりと聞きては、堪へがたき思ひの、沸き出るもはかな

しや。

嗚呼悲しきは墳墓なるかな。人々の古今東西、みな生を惜しみ死を厭ふも、これあるがためならずやなど思はるるも、愚なるものゝ言葉のみとも覺えず。妻子珍寶乃至位爵、それも冥土の土産にして、持ち往かるべきことかは。麻の衣に珠數一聯、それさへ、やがては、土と化し苔と腐りて、思ひやるだに、身の毛よだちて、あゝいやだ〳〵、あれを思ふても死にたうないと、さる御法義者の仰せられしとぞ。昨日までも今朝までも、やれ御藥よ御醫者よと、あまたの侍女家來などに、かしづかれ玉ひし御前樣も、一たび無常の風とやらに吹かれたまひてのちは、二世も三世も契りたまひし、御方にさへいやがら

れたまひ、野邊の御とぶらひ式のごとく濟めば、けにや常日頃、はか〳〵しうは言葉さへたまはらざりし下司男たち、板子一枚隔たるとはいひながら御頭の上をふみにじりて、脛毛さへあらはなる、むくつけき男等まで、が〳〵と噪ぎ立ちて大根牛蒡を弄ぶやうなるていたらくにて、御土を被ひまゐらするを、見たてまつりては、まことや貴賤も老若も、平等無差別、夢が浮世か浮世が夢か、はかなきは墳墓なるぞかし。

人の壽命は、老少不定と、佛の說き玉へど、青春の齡酣にて、あたら花を散らし蕾を折るも、いづれ前生の約束事と、因緣定まる譯ならば、老て死するも、若うて逝くも悲しうなからう理屈はなけれど、諦めのつかぬこと

も無い筈。青山の幾千の墓を見るにつけても、人の命に定めなければ、生れ落つる赤ん坊より、幸あるは百年の福壽を保てる老翁まで、人さま〳〵の生涯に何れも天より授かりし浮世を送りて、露と消え花と散りて、殘れるものゝ歎きとなれるに異りはなけれど、さるにても大かたは天命を完うして、逝くべきところに逝ける身なるべければ、辛きなかにも慰籍ありて、泉下の眠りも、さぞや平穏なるべしと自から貴さも増して、拜む手に力も入りて、覺えず頭の下るも是非なし。

さればこそ悲しみても猶ほ餘りある悲さは、偶々生を此の土に享けながら、あへなくも兇刃にかゝり口惜しき命の捨てやうせし人々の上ぞかし。魂魄長く宙宇に彷

徨ふとかいひけんも詐りならず、幽靈の迷ひ出でゝ、あの世より復讐の執念、それも眞なるべし。物言へばそが墳墓の動ごきやせんかと心すごく覺ゆることはこれなり。

猶も〳〵あはれに、その人の死にざまさへ、判然と眼の前に見ゆるやうに、はかなくつらく覺ゆるは、人の刃にもかゝらず、天の福壽をも完う得せずして己れの仕業に、己れをはかなみ、天を怨み人を憤りて、己が手に、己が身を亡くせし人々なり。幾世のむかしより、かゝる人の絶えぬを見れば、人の子の辛き悲しき命運のほども推し計らるゝぞかし。この身いとしからぬものもなきに、恐ろしき刃もてこの胸を貫けば、苦しき思ひの迸し

り出で丶、安らけき身となりやしつらんと、いひし古人の述懷も、そゞろに思ひあはさる丶に、何事ぞその身を自ら殺すは不仁なり不德なりなど、冷酷石の如きおのが心もて、かゝる人々の胚腑を忖度し、しかつめらしき雜言過言、憎みても餘りある言葉なるかも。貴き人の憤墓に、何の思ひやりもなく、自らの幸なるにひきくらべて、紙の上にての卓論名說とやらの、死屍に鞭うつやうなる無情も、學者といへる大看板に、世の人もあきれはて、墓の下の鬼哭啾々には、思ひも及ばぬもの多し。

青山墓地を入りて、左に曲り往くこと一町ばかり、あまたの嚴めしき碑文を拜みて正何位從何位の、それも大

かたは雨に打たれ、風に曝され、文字さへ明かならぬに、古色蒼然とやらの品位も備りて、嗚呼あの君もかと、しきりに感慨に打たれながら、猶も進み行けば、鐵柵引き巡らしたるなにがし伯の御墓の傍に、憤墓といふは名のみにて、小やかなる墓標立てり。まだあたりの土さへ乾かぬに、その主の逝ける日の遠からぬも知られ、香華の絶えぬに、その人がらも推しはかられて、心ゆかしう覺ゆるを、いかなるゆえにや、この人の墓じるしの都の人の噂に上りて、奇を好む人々の、多少の憫れみも添ひて、をり〳〵こゝに詣づるとぞ聞く。

さなきだに物淋しき墓地の、このごろの降りみ降らず み霤陶しき五月雨うちつゞきては、書猶ほ物すごく、心

弱きものは、やはか此處をば通るまじきを、何事ぞ長き日も全たく暮れて、人の往來もやう〳〵に途絶えし午後九時頃、篠つく雨を物ともせず、人目を憚ればにや、御高祖頭巾に深く面を包み、かの新しき墓標に近づく女あり。

やがてそれと眼敏く見出したる時の双眼は涙に充て、齒を食ひしばる忍び泣きに、さしたる傘をも投げ棄て、倒れんばかりにうち歎き、『かういふことになるほどならば何故に一所に死なふとはいふてくださいませぬ。妾しの心盡しが、却てあなたの仇となり、思ひつめ遊してのこの御ありさま口惜しうござんす、なつかしうござんす。外の事ならば前世の約束事と、あきらめも附きまし

やうなれど、こればつかりはどう思ひかへしても、あきらめやうもござんせぬ。世間の人さまが、妾しの手にかかつて御なくなりなされたも同じ事とおつしやるのも、決して〳〵御無理とは思ひませぬ。妾しもやがてあなたの跡追ふて參りましせうほどに……と申しても今は死ぬにも死なれぬ情なさ、御ゆるしなされて御免なされて』と、はら〳〵ここぼるゝ涙に、小さき墓も浮かぶやうなり。

越しかた往く末の思ひは、さま〴〵にかけ巡りて堪へがたきはかなさに、淋しき土地の夜陰なるをもうち忘れ、高絶無情の天を仰いで、睨らめる眼なざし恐ろし。

この女の思いを語れば、げにこれも浮世の一節、あは

れなる泉下の人も、うち微笑みて、與に歌ひやしぬらむかし。

その二

桑田變じて海となるの譬へにもれず、昔は管絃絲竹の宴にうつゝをぬかし、翠帳紅閨の夢に後朝の別れを惜しめる痴者の往來絶間なく、繁昌比ひ稀なりし根津の里も、今はた矮屋陋巷の貧民窟となり、道行く人の昔語りも追追に消えて、僅かに老人どもの述懷話しに、さてはさうかこあきれかへるほどの淋しさなるに、腐ても鯛は鯛とやら、以前のまゝの大厦高樓、その面影の一粒種を辛くも遺して、泉水の眺めも清らかに、商賣替の旅宿業も、物躰ぶりて、天晴れ紫明館と銘うてる表札ものゝ〳〵し。

今日は霜月の空朝よりくもりて、肌を劈くほどの寒さ

に、晝よりはちら〳〵雪の降り初めて、冬枯れの寂しさも景色を添へて、上野谷中の樹々もやう〳〵に笑を含みつ。夜に入りては、ます〳〵降りしきる雪の寒さを、此家の奥座敷に避けて、火鉢かき抱きて、圓行燈の影ほの暗く、しめやかにうち語らふ男女あり。

銀杏返しの鬢は稍々亂れて、さきほどからの酒機嫌に、兩の頰には紅さして、眼は輝くやうなり。『ほんこうに御久し振りでございますこと、かれこれ足かけ五年ぶりでございますよ、昔を思ひ出しますと、全で夢のやうでございますね』と、女は茫然として、唯その昔なつかしげなり。

『一体どうおしだ』と男の問へば、『申すも御恥かしいことでございますけれど、貴君と御別れしてより、國に歸りま

してからがこの身の不運續き、父は御存じのあのやうな意氣地なさに、身にも及ばぬ事のみたくなみては、又しても失敗だらけ、家の破滅は眼の前に見へて居りまするのに、母はなさぬなかの意地惡根性、かりそめにも親と名のつく人を、こやかう申しまするのも、はしたないことでございますけれど、あのやうな母さんも少なうございます。何につけても妾等姉妹三人に面當て、實の子の可愛うない人もございませねば、蔭ひなたの出るのは、覺悟して居ましたのなれど、あまりといへば情ない仕打ちと、姉妹三人うち寄つては、泣かぬ日とてはございませなんだ。年が年なれば打ちちやうちやくもございませねど、やれ穀潰しだの、いたづら者だの、意氣地なしだの、

やくざものだのと、あられもない悪口。親といふ一字に、何事も泣き寐入りの悲しさつらさは、どのやうにあらうと思し召します。吾が家ながら餘りの居辛さに、姉妹心と心を合せて、いつそ思ひ切つて勤め奉公でもと、唯ひとりの父さんいとしさに、さま〳〵の事に心を碎いて居ました矢先き、思ひがけない處より、妾への縁談、先方はと聞けば、これはまた二度喫驚。聞くも忌々しい廓商賣、いくら男が好うて、身代があらうとも、こればつかりは、と拜むやうに父さんに賴めば、向ふから拜み返され、察しる〳〵、可愛い娘のことちやもの、私ちやとて、あのやうな所へ嫁りたくはなけれど、これが浮世の義理づく、金縛りに足も手も出ないやうな無理難題、辛くも

あらう心苦しくもあらうが、一月でも二月でも、名義さへ立てばそれですむこと、どうぞ心を鬼にして嫁てくれい、拜む〳〵、と、老の涙に言葉も震へて、賴まれましたのに、口惜しいながらも我が折れて、その年の十月、地獄へ落ち往くやうな思ひして、あはれな嫁入りを致しました。』と、言ひさして、鼻うちかみ、見上ぐる兩眼に涙浮かみぬ。忽ちまた微笑して、『これはまだほんの序幕でござんすよ、まあ御聞き下さいまし、人間と申すものほど、不思議な者はござんせぬ。くしや〳〵思ひ案ずる間が地獄で、諦めがついて度胸がきまつた時は、もう極樂淨土でござんすね。いやな〳〵、聞いても身振ひするやうな淺間しい人間はづれの商賣も、慣れゝばこゝも浮世、

苦勞もある代りに樂もございます。それにね、貴君その夫といふのが、思ひの外優しい人でございましてね、いえ、御のろけではございませんの、全くなのでございますよ。それで自と家業に勵みもつきましてね、まあ夢のやうに二月三月を送りまするうち、その年も暮れて明けの春、正月の御禮に珍らしく里に歸りましたのが、そもそも妾の運の盡き。人間は塞翁の馬とやら鹿とやら、今から思へば何も因緣づくとでも申すのでございましやう。あゝ思ひ出しても厭になりまする、久し振りに兩親への御見舞、まして目出度い正月といふのなれば、草屋のうちにも春は來て、御慶の聲は羽子の音と共に此家にも聞へる筈でございますのに、どうした譯か、ふた親そろ

うて妾の顏を見ると浮かれ顏、物恐れでもしたやうに、御めでたうの挨拶も冴えぬ審しさに、誰殿も御變りもございませんでと問ふに、うむ異りはないと父さんの御返事危げなり。見れば姉のたよさんの姿見へぬに、姉さんはと聞けば、繼母はつんとしてすました顏つき、仔細なくては、と胸も躍りて、嚴しく問ひ正せば、蚊の鳴くやうな聲して、父さんの言ひ譯、實はお前にも相談してから、と思はないでもなかつたのぢやが、節季に迫つての金の催促、無理算段も今は叶はぬ心苦しさに、この市中を駈け歩いて、誰れ彼れの許を尋ね、泣くやうに頼めば、こちらの頭の下るほど向ふは反り返り、出來ませぬ〳〵と、けんもほろゝの挨拶に、悄然と我家へ歸れば、げ

に親は泣き寄り、姉のたよが見るに見かねて、涙ながらに兩手をつかへ、御父さんの御心配を、大恩受けました妾が、側に見てその儘にはして置かれませぬ、かよわき女の手一こつでは、こても大金の調達思ひも寄りませねば、どうぞ妾を苦界に沈めて、一時の御難儀を御凌ぎなされてくださりませ、いえ！〳〵その御斟酌には及びませぬ、親のためにこの身を棄つるは、これも浮世の習はしではござんすまいか、昨日も御隣りのお繁さんに聞けば、遠い長崎から、玉探しこやらで態々この土地迄來て居る人がござんすさうな。こんな不器量ものではござんすけれど、御役に立たぬこともござんすまい。妾は一番總領娘、御ためになるも此の時、人間は七たびころげて、何

こやら申しますれば、また花も咲いて、笑ふ時もござんしやうほどに、妾の身はなきものと思しめせばそれで濟むこと、直の妹の袖ちやんはあゝいふ處に義理往生、さぞや〳〵うれしうないことづくしで、月日を送るのであらうと思へば、姉の妾が、たゞあつけらかんとすましては居られませぬ。季の幾ちやんだけは、御父さんの御丹精で、せめて人並の處に參りますれば、この家の名前も立つ筈、人樣の手前恥かしいと仰りますれど遠い親類の厄介になつて居ると仰しやれば、人の噂は七十五日、恐ろしいことはござりませぬ。是非に〳〵このたよが所望に、首切るやうな辛さを忍びて、泣く〳〵の生き別れ、今日ごろは最早長崎に着いて、褄襠姿の涙顔で居るであ

らうと思へば、めでたい正月の屠蘇も喉へは通りませぬ。姉妹中でも格別に交のよかつた同志、お前の悲しいのは無理とも思はぬが、泣いてくれるな泣いてくれるな、この親父の心は遠のむかしに死んでるわい、と始めて明かされし姉さんの身の上。あゝ常日頃から、温しい優しい箱入娘、近所隣りの評判も、一番すぐれし姉さんが、あの氣の小さい心から、どうしてまあそんな度胸の据わりしものか。今の自分が商賣に引きくらべても、これからの苦界の勤めも、思へば〳〵覺束なく、御可愛想で〳〵、立ても居ても胸騒ぎのみして、耐るほど猶ほ涙の流れ出るに、姉さんの涙ぐめる、やつれた顔も見るやうにて、飛んでもない御正月と、くやしく情なく思ふうち、ふと

何か捕へたやうな心地に、胸撫で下し、さうちや〳〵と獨り合點して、御暇乞そこ〳〵に、わが家に歸りましたれど、夕暮時の歌舞の菩薩、はや居ならべる萬燈會に、またもや姉さんの面影うかびて、矢も楯もたまらず、その夜は胸苦しとて、夫にも碌々物言はず、うち臥しました夢の惡さ、御察しくださりませ。その夜二時ごろ、少しの路用にこの身をかため、さすがに名殘を惜しみながら、急ぐ道に心のこりも薄く、その夜は停車場の定宿に、長き夜のあくるを待ちかね、一番瀛車に飛び乘つて、行くや築紫の西の端、悲しい目に逢ひましてございます。』と、今昔の感に得堪へでや、はら〳〵ここぼるゝ涙に顔曇りぬ。またもや言葉を續けて、『久しぶりに御目に

かゝりし貴君に、かやうな涙顔、恥かしうないこゝはござりませねど、覺えずその時の事思ひ出し、涙に暮れましでござりまする、御赦しなされてくだまりませ。まだその時は、妾もやつと二八の花盛り、若いだけに後々の分別もつきませず、唯々姉さんなつかしさに、兼ねて聞き及べる人を尋ねて、世話を賴みしに、いか程お前さまが姉思ひじやとて、五百圓の大金御自由にもなりますまい、姉様に代つて、お前さまが御身を御沈めなさるれば、こもかく、何事も金づくゆゑ、二百里の長旅も、御心一つでは御徒勞になりまするぞ。さて〳〵御笑止のことに存じますること、のつ引きならぬ釘かすがい、何の苦勞もないやうな男の口前、心憎く、あゝどうしやうどう

しやうこと、腹も立ち愚痴も出て、思へばどうした譯で、こんな處まで迷ひ來たものか、こ心は糸の如く亂れて、果てもなきに、さあどうしなさりまする〳〵こ、急き立てられて妾も堪まらず、よろしうございます、妾を身代りに立てましやうほどに、姉さんを御歸しなされて、こ思はず手を合して、拜めば、いえ〳〵それは叶ひませぬ、叶ひませぬぞ。先程申しましたのは、あれは御氣の毒に存じての此方が戯言、總じて廓の立て引き、蝶よ花よこ何不自由なく御育ちなされし御孃樣達の、御存じなきは御尤なれど、金は金人は人こ、差引勘定の出來ぬが此廓の法、かうなされてはいかゞでござりましやう、折角お前さまも姉さまを御思なさるればこそ、遙々の御旅路、

たゞこの儘に御歸りなさるのも如何な譯でございますれは、一層のこと思ひ切つて御姉妹御一所に、力にもなり、たよりにもなられて、御互に御辛抱、長い勤を短うして、父御の御ために御成りなされては、この鬼にも泪の親切言葉に、腹の中の黑さは見分けもつかず、ついうかと乘りて、よろしう御賴み申しまする、と唯ひと言に事定りて、その晩からの浮氣商賣、長崎は丸山の翠陽軒に一枚看板、藝名小妻と名乘り出て、その時からの評判者は、憚りながら妾のことでございますよ。』と、女は勢ひよく語りて、盃とり上げまあ御酌をしてくださいまし。

元在に覺なり

その三

『人の一生ほど、わからぬものはございませんね、』と女の聲に力入りぬ。『昨日までも今日までも、主婦顏して、少しはをかしいことも、おもしろいこともあつた身が、心からとはいひながら、げに浮世の轉變、電光石火も及びませぬほどの身の變りやう、初めて姉さんに逢ひましたときは、姉さんは思ひがけなさに、妾は心苦しさに、悲しいやら、怨めしいやら、はかないやらで、まあ姉さん、まあ袖ちやん、お前も、とたゞ一言に、胸塞りて、血を吐くやうな思ひとは、こんな時の事を申したのでございましやうね。泣きに泣いて、大泣きに泣いて、飛んでもない新吉原が出來ましてございますよ。姉妹一所に居て

は、何かにつけて涙絶えず、顏見合せては、國の事、父さんの事のみ思い出し、却て歎きの種となることが多いかはりには、また苦勞辛苦を語り合うて、慰めたり慰められたりして、はかない月日を送りまするうち、御承知の通り妾は吾妻育ち、どうでも女子は惡性もの、吾妻育は蓮葉なものぢやへ、と何やらに歌ひますね。長崎の人はどうしても、氣の利かないやうな、茫然したやうな處があつて、てきぱきした、洒落したところがないもんでございますからね、妾の變な氣象が呼物となつて、勢ひよく、十日二十日と立ち行くにつれて、商賣となればこちらも意地づく、負ける事が大の厭いな根性に、足かけて、ばつてん連の九州女に、江戸つ兒が負けてたまる者か、

と場所柄だけに氣も強く、心も強く、手錬手管といふやうなことも、自と覺ゆる合點の早さに、朋輩共には舌を巻せ、半年目には土地の人にも名前を知られて、小妻小妻と浮名を歌はれ、瞬くうちにめきめきと上りで、天晴れ翠陽軒の大立物。われながら腕の竦さにあきれかへりましてござりまする、』と氣焰萬丈なり。

男はたゞ事の意外に呆然たるさまなりしが、『まあその先きを聞かせよ、』と落ち付き顏なり。女は愈調子よく、『どうしても、廓は意地と張りで往くのでございますね、世の中の事、大方はさうしたものでございんしやうけれど、この里では別してこれが第一、どうぜ浮世は捨てた身體、まかり違へば生命をかけても、と度胸を据ゆ

れば、さなきだに大抵は間のぬけた痴者ばかり通ふこの土地、怒らすも、笑はすも、こちらの勝手次第、いや面白い段ではござりませぬ。これから、漸々妾が浮かぶやうな御話し、くだ〳〵しうはございまするが、莫蓮者の一代話し、後生だから御聞きくださいまし。長崎は本五島町に、今も貿易商の勢よく、三代引き續いての大分限に、幅を利かして、男もよく、心もよく、身持もようて、戀知らずと渾名を享けし竹島といふ人、どうしたものか、神代このかた、變らぬとはこの道、ふと通ひ初めし丸山の、酒の味を忘れかねてや、しげ〳〵通ひ來る御馴染こそは、美貌この樓に隱れなき、小若さんとて、腕達者の評判者、思はるゝ情けに女も絆され、身に添ひそめし移

り香の、憎からう筈もなく、あなたの心變らねばこちの木まくら一筋に、と思ひつめて、戀し〳〵の文のやりとり、噂もばつと高うなりて、人さま〴〵の品定め、大かたは嫉さの餘りの蔭言、うるさい程でござんした。

ある夏の夕、ぢや〳〵と入り來る客は十幾人、御世話役は竹島樣、折ふし、苦ちやんは病氣で勤めも出來ざるに、樓主も心配して、誰彼の名代撰に、とう〳〵くじが妾に落て、よろしく賴むとの一言、御承知ではござりますまいが、長崎では宴會といふ宴會も、廓で開くといふのが上等格、萬事は花魁が引き受くるのなれば、その引き受け役に當りしものゝ、心配といふのはござりませぬ。さればとて賴まれしとに、否とはいはぬが、妾の氣象、

若ちやんへの手前もあればと、心のありたけを盡して、落ち目のないやうに、心を配り、四五時間の辛い勤めも、まあ〳〵無事に終ひし時のうれしさ、若ちやんからも染み〴〵御禮を言はれて、樂しかりしその夜の翌日、長々と奉書に認ためし大封の書信屆きしに、何事と封押し切れば、これはまた思ひがけなき人々の戯事、昨晩は容易ならぬ御厄介、厚く御禮申し上げまする、と竹島さんを筆頭に、十餘人の連名、忠臣藏の連判狀見るやうな心地に、人々も吹き出して、まあ〳〵と眼を丸うした人もざんしたが、朋輩の人々へ開けらかすのも、自分の功を誇る道理なればと、そのまゝに單笥の底へ了ひ置きしを、この事いつしか若ちやんの耳に入りて、腹立つこと大方

ならず、嫉妬の焔を燃して、小妻さんこそは宴會に事寄せて、大事の〳〵人の男を寐取たものに違ひなし、と懸想文か何かのやうに、奉書の手紙に、惡名附けての大難題に、妾は喫驚して、言葉を盡して言譯すれば、猶ほもつけ上り、論より證據のその手紙、御見せなされ、この無禮の一言に、妾も赫として、左ほど見たくば御見せ申すに事はなけれど、お前さんの言葉が氣に喰ひませぬ、妾も女の端くれ、そのやうに言はれては、金輪際見せることはなりませぬ、さほど自分の男が寐取つてほしくば、見事取て御覽に入れまするぞ、と賣り言葉に買言葉の、喧嘩に花か咲いて、意地を立てぬく女同志の、その日より打て變つた仲違ひとなり、思ひも寄らぬ確執に、若ち

やんは狂氣の如く男を責むるに、げに〳〵佛の顏も三度
とやら、あれほど惚れ合つた男も、急に女に厭氣がさし
て、自づから足もこちらに向いて、濡れぬ先きこそ露の
何とやら、嘘が誠となるも浮世、妙な交になりまして
ざりまする、』と語り續くる顏愈艶なり。

女は微笑みて、『これがそも〳〵妾の御運開き、をか
しいではござりませぬか、妙な事から妙な事になつて、
うれしいやら、悲しいやら、譯の分らぬやうな始末を、
男も見て取り、いかにこの里の事とはいひながら、人の
噂も聞き辛いではないか、お前も彼是れ足かけ三年のこ
の商賣、い丶加減に見切りを附けては、とのうれしい言
葉に、ありがたう存じまする、と涙ながらに御禮を述べ

て、始めて洗ふ泥水の、身も心も奇麗さつぱり、西山
のほとりに粋な住居の仕合者となりしは、今年の二月。
それがまたどうして東京へとの御尋ねでござんすか、さ
ればでござりまする、かやうな譯で、竹島樣には容易な
らぬ御恩を受け、半年あまりも、不肖な身には、餘るほ
どの御情を受けましたのでござんすけれど、或る月の夜
の御話しに、お前もかうして一生日蔭者で世を送るのも
つまらないではないか、妻には委細の話しも聞かせてあ
るし、さういふ不幸な御方なら、妾には更々御遠慮はご
ざりませねば、共々力にもなつて貰ひ、御氣慰めも致し
たうござりまする、と妻も云て居る位のことなれば、己
れに對して憚る所は毛頭ない、お前の心一つでは、生涯

友達同樣御交際もするつもりじやが、元來怜悧に生れながら、一家の不仕合せのための今の沒落、このまゝで一生朽果るのも、つまらないことゝおれは察しる。國には親もあれば、母方の伯母もあるこのこと、また東京には、お前の以前御恩にあづかつた御方もあるといふではないか。能々相談して、天晴れ美事に一旗擧てはどふであらう。よく〳〵おれの心中を察して、見棄られた杯と怨んでくれるな、こそれは〳〵酸いも辛いも、かみ分ての御親切な言葉に、妾もしみ〴〵忝う覺えて、なんの御怨み申しましやう、あまりの勿躰なさに、御返事の申し上げやうもござりませぬ、左樣なれば御言葉通り、心を研き氣をふり立て、出世して御覽に入れまする、先づ夫れ迄

は御目にもかゝらぬことなれば、隨分御用心遊して、とつらい別れなれど、心はすが〳〵しく、厚く御禮を述べて、住み慣れし土地の、さすがに名殘り惜しく、後髮引かゝゝ心地して、あの地を立ち、國には僅か二日の滯留、唯貴君をたよりに氣を引き立てゝ、三日目の朝にはやや出立、一足飛びに東京へ參りて、それとなく貴君の御噂聞けば、どうやらまだ御獨り住居、六年も逢はぬことなれば、どのやうにか御變りなされたことであらう、と御顏見るまでは氣も休まず、一旦汚れしこの身なれば、御傍に往くも恐れ多けれど、そのむかし御約束申せしこともあり、御詫もせねばならず、この身の辛苦話も御聞きを願ひたく、思ひ餘つて今日の推參、御恥かしうぞんじ

まする。まあ妾こした事が、恥かしいことを、御目にかゝりしうれしさに何事も御話し申し、さぞ御聞き辛うございたらう。見ればごうやら以前よりは御瘠なされ、御活潑の御樣子もどこへやら、心に餘る御心配事にても御ありなされてか、と心がゝりでなりませぬ。さあこれから貴君の御身の上、御聞かせなされて。』と、愁を含める眼元に、男を見上げて、宵の窓うつ吹雪の音に、おゝ寒むこばかり身を寄せて、男の答へ待ちかねたり。

その四

女は中國生れ、さる農家に育ちし無邪氣者、姉妹三人の、何れも伎倆好しの中娘、ふとした緣につながれて、七つの歲に商家へ養女、その家の東京に移るがまゝに、なつかしき眞の父母にはその時別れて、幼い時より慈愛といふ味知らねば、人の世の辛き苦しき涙も覺えて、智慧のつくことも早く、朝な夕な女中同樣の殘酷き扱ひも、あゝしたものと諦らめつけて、むつかしき母親、意地惡き姉、また察しのわるい二人の兄さんにも、夫れ〴〵機嫌取りて、立ち働く憫れさを、あはれと見し人もなかりしぞかし。追々に年も長けて十五の春、それまでは年中奉公暮らしの、泣いて明かして、まことの親のみ戀しか

りし身の、俄に暇とりて歸れとあるに、養家に還れば、例の姉さんのしかつめらしく、「お前はどう思ふか知らぬが、もう彼れ是れ年頃ろ、お前を貰うたのも、素はといへば、あの小い兄さんの嫁に、と思ふての此方の了簡、弟もまだこれと定まつた商法もなけれど、氣立は宜し、浮氣はせず、男前だつてお前の良人にして、恥かしくはなからう。お前さへ承知なれば、明日にも祝言と、家内中は相談を定めて居ます。よもや不承知はなかろうと思へど、あとでとやかういふやうな事があつても氣まづい話しなれば、一應お前の心中も聞いて見る譯。」と、足元から鳥が立つやうな話に、吃驚りして、とやかうの返事も出ず、沈み返りて、追々は涙ぐめるも、道理りや。と

ういふものか、子供心にも小い兄さんの氣象を嫌ひて、これまでとなく、やさしくさるゝことに、腹も立ち、惡まれ口きいたも幾度、當り前なら、厭でござんす、と判然いふ所なれど、かりそめにも養育の大恩食みし身の、さることもならず、さればとて諾々と二つ返事は、猶ほこの心に對しても出來ざる理由は、外にこそあれ。この家の遠類にて、當時大學に遊びし書生の、名は出見とて、おり〳〵はこの家に來るに、いつしか女の馴れ初めて、子供心にも、活潑なる書生肌の戀しとにはあらねど、唯唯なつかしく、便りなき身は、をりふしその身の苦痛の程も聞いてもらひ、廣い天地にこの人ひとりを、唯神とも佛とも頼みて、辛き世の慰みとせしが、追々年の長く

るに隨ひ、なつかしさとよりは戀しさやうに、やがては恥かしさも加はりて、朝夕の物思ひの種ともなりける を、男も悟りて、行く末の約束さへ、互の心と心に決れば、今のさま〳〵の苦勞もなか〳〵に樂みとなりて、今日このごろの日暮らしなりしを、思ひがけなき姉からの今日の相談、はか〳〵しき返事の出ざるも、所以あり。

さればとて、默つて居る譯にも往かねば、これぞ身の一生の一大事と、度胸を極めて、『御言葉に脊いては姉さま始め皆々樣に、相濟みませぬ譯なれど、少しく心に思ふ所もございますれば、いえ〳〵、決して〳〵兄さまを御嫌ひ申してなぞ、と申すのではございませぬ。何事も言はぬが花でございましやうほどに、兄さまには他から

美しい奥樣御迎へなされてくださりませ。これまで受けし海山の御高恩は、いかやうなることいたしても、御報申しますれば、これだけは御勘辨なされて。』と、斷然いへば、姉は不興氣なる顏して、それよりは何事も言はず、その場はそれにて事濟みたれど、これより後はうつて變りし不人情、家内中の誰彼となく、酷く當るに、さては と悟りし女の、さながら針の莚に坐りし心地して、ある夜茶の間に坐りながら、それとなく聞き耳立つれば、ごうぜこの家には用なき彼女、いつそ妾奉公にでも出さうではないか、と語るも恐ろしき事聞いて、魂も身に添はぬやうな思ひに、そのまゝ裏門よりぬけ出で、戀しき男の宿を尋ねて、『かやうな譯なれば、最早あの家には歸ら

れませぬ、どうぞ貴君より國元の伯母に御手紙を御差出しなされて、妾を國に歸へすやうに御取計ひくださりませ。』と、女の賴むに、男も否みかねて、いふがまゝに手紙認め、國に送りけるに、伯母なる人も大に驚き、足を空に上京して、男にはしみ〳〵禮を述べて、女を連れて國に歸りしは、今より五年前の昔し語り。それより後ちは、種々の薄命なる女の境遇の、自から男にも手紙出すことさへ途絶えしに、その後ちはどういふ月日を送れるやら、と男も思はぬ日とてはなかりしが、男も浮世の波に弄ばれて、またさま〳〵の移り變り、こゝにも涙は絶えざりし。

男は女と同國これも農家の總領息子、世が昔しならば、

星を戴き月を踏みて、鋤鍬取りて牛追うて、茶摘歌田植歌に、娑婆の苦勞といふもの知らう筈なく、後生大事に祖先の田畑守りて、この世からなる極樂の、をかしき世を送るべかりしを、げに書を讀むは憂患の始めとやら、幼き時より怜悧に生れ、讀み書は固より、算盤まで、達者に覺ゆるより、あの兒は豪いあの兒は豪いと、村々の評判者となりし嬉しさに、子を思ふ心は闇の父親は、夢中となり、この兒だけは天晴れ學者となして、家を興し名を成さしめむと、の大願を起して、用意をさ〳〵怠りなく、思ふやうに子の成人するに勵みもつきて、小學中學高等學校と、追々に入費のたゝみ嵩むのも更に恐れず、行く末の夢面白さに、田畑惜げもなく賣り飛ばして、學

資と替へ、吾が愛兒の望むがまゝに、大學法科に入れ、三年の長さ月日もいつしか過ぎて、芽出度卒業の榮を荷ひ、法學士出見速雄の肩書き嚴めしく、意氣揚々と、故郷に錦を飾りしときは、村の人々の、殘らず誠を盡しての祝ひ言葉に、親の心はまた格別にて、嬉し涙に言葉も出でず、健かなる、勇しき子の顏を見ては、あゝ學士になつたかと唯ひと言。立派なる卒業證書を見たる老の兩腕は、たゞわな〳〵とうち慄ひしぞかし。

大學にての成績も宜かりしため、卒業後間もなく本省に奉職せる仕合せに、兩親の喜びは何に譬へむやうもなく、はや花嫁の相談に心配して、あれ可けむこれ可からむ、と終夜の人撰みに、一睡の夢さへ結ばぬ夜も幾夜、

げにありがたきは親の思ひなり。まして父親は苦勞症の氣も早く心も敏きに、思ひ出しては矢も楯もたまらぬ氣性なれば、何處に某といふ話を聞きては、千里の道も遠しとせず、自らの御出馬。あゝ忰の嫁探しに二圓の下駄が五足臺無しになつた、と酒機嫌にて母親への戯談、それも誠なるべし。

さてあるやうで無いのが嫁。俗にも言ふ長し短かし、田舍の人の堅氣には、江戸育ちはてんから御氣に召さず。さればとて、田舍育ちに應しきは、猶ほ見當らぬに、父親も落膽して、どうも思ふやうに往かぬものだ、とただこれのみを物思ひの種となしけるに、これをこそ因緣といふのにや、隣村に人にも聞えたる資產家にて、さ

るべき獨り娘持てるを、かの父親聞きて、遽かに心動き、げに燈臺の下暗しとは、これなんめり、こうち笑ひつゝ、さるべき人を介して申し入れけるに、話しはする〳〵と纏まり、見合も式の如く濟み、櫻桃の好季にめでたき大禮擧げて、やがては奈良吉野を新婚旅行、何事も芽出度盡し、夫婦仲も睦しく、夢のやうに半年一年と暮すうち、可愛き孫も生れて、身と心との幸福もこの一家に集れるこそ覺えし。

何事も波風なき浮世ならば、長閑き人の一生なるべきも、蟻の穴より千丈の堤も崩るゝ道理免れがたく、琴瑟相和すといふも束の間、思ひの外なる事より、兩家の間おもしろからず、さしも繁かりし母親同志父親同志の往

來も、追々に疎くなりて、互に睨み合ふやうになれるに、若夫婦の情愛も以前の如くならず、日に〳〵冷かになり行けば、一層暫らく別居した方がよからうとの父親の方寸、否まむやうもなければ、半年以前より男は獨住居の、寂しき月日を送れるうち、不思議にもかの女の尋ね來ての長々の物語りに、いとゞ憫れを催ふして、己れの幸なき身をも審かに語り、「何をいふても書生上り、折角この身を賴りての上京なれど、思ふやうに世話も出來ねば、たゞわが心一つを賴みにして、以て生れた水商賣の御茶屋かごつかに奉公してばどうであらう。積る話はまた緩々聞くこともあらうなれど、取り急ぎ、身の落ち付き處を極めるがよからう。」この男の勸めに、女も餓

き、その日より新橋の御待合奉公。またしても〳〵浮きつ沈みつ、身につきまとふはかない運命も、甘んずればこれも樂み。娑婆界にての喜見城は、かゝる處にもある者ぞかし。

その五

何事も上より下に移る世の習し、とはいひながら、さりとては筆の汚れと、物堅き人の眉うちひそめて仰せられける。いつの頃よりか言ひ初めけん、明治の世は藝者の世なり、今の天下は待合の、と、人惑せの流言、聞くも恐ろしき話なれど、火のないところに煙は起らぬ道理、爭はれぬものは日ごと夜ごとの待合の繁昌、停車場のそれにも增して、往うさ來るさの浮かれ男の、世の常の痴者ならぬはおろか、貴きあたりの方々さへ、人目忍びたまふけしきも見えず、意氣得々として葉卷など燻らせたまひ、二頭立の御馬車を、勢ひよく、御待合への横

附け、不思議なる世とはなりしぞかし。

その名美にしてその實のさあらぬもの、待合の如きはなし。と、大方の人はいふめれど、さても迂遠や、あれも人の子、これも人の兒、神ならぬ身の、弱點といふもの持てば、智なるものもこゝに來りては智を失ひ、貴き人も貴さを失ひ、何れは金がいはする追從輕薄に、舌皷うちて、われ人共に愚かとなれるも、己れに八分の弱みを荷ふ罰當りなるべし。ましてや、かの女將といふ奴、世にも稀なる豪傑ぞろひ、白刃頭上に落ち來るも、ビクともせざる大度胸に、人の心を覗く、眼鏡さへ持つらむやうなる智慧者なれば、何事も思ふがまゝに、男を操り、女を御して、古今の哲學者御僧達の、思ひも及ばぬ人生

觀に、娑婆界を達觀して、天晴れなる大悟徹底、覺の境界をば疾くに通り越して、佛ども鬼ども、譯の別らぬ竦腕には、千金萬金惜げもなく抛出す男もある世なり。

新柳二橋と並び稱せられし榮華は、昔の語り草となり、柳の大路やうやく寂れて、何事も新しさを好む世に、東京の繁昌を新橋一とつに集めて、女ならでは夜の明けぬ名所の隨一、攀花折柳の樂みに、我も〳〵と、若殿原の通ひ路絶ゆるとなければ、南北の美形幾百人、各々その所を得て、さらぬだに勢よき女將達は、これに力瘤を入れて、昨日一とつ、今日一とつ、明日また一とつ、と殖へ往くものは、御待合の粹なる看板、四海波靜かにして、太平の餘澤著るし。

煉瓦地島森の美形を相手に、新橋より程遠からぬ八官町に、新月亭の名前もゆかしく、西洋風の構へ嚴めしき御待合あり。幾十といふ座敷に綺羅を飾りて、調度物の具に數奇を凝らし、廣からねど清らかなる庭園をもそなへて、地の利人の和はいふに及ばず、正月越しの梅見月に、天の時さへ加はりて、今日この頃の忙がしさは、何に譬へむやうもあらず。

春とはいへどまだ冴ゆる夜に、利鎌の如き寒月西空に懸りて、さすが繁昌の土地も、人足やう〳〵途絶へて、銀座街頭の大店も爭うて戸を閉づる夜深に、『お袖姐さん居ますか』と、駒下駄の音から〳〵と、この家に訪る藝者あり。『あゝ居ますよ、おやまあ文ちやん、まあ御珍

らしいわね、さう御座敷の御歸りかい、大層御機嫌だね、まあ御上んなさい、』と愛想よし。『大變御靜かだわね、』と文ちやんの怪しみながら、ずつと通れば、長火鉢の傍に迎へて、さし向ひとなり、『さあ御座んなさい、いえね、今日は平常にない閑暇なので、退屈まぎれに小說でも讀んで見やうかと思つてた所なんだわ、それにね女將さんも外の女中衆も遠出なんだからね、御留主役を申しつかつた妾、御客はなし、寂しくはあるし、欠伸の三つも四つもして、困り切つてたとこなんだから、御珍らしく文ちやんの入らしつたのは、地獄に佛といふ格なんだわ、ホヽヽ』と袖ちやんの笑へば、『大層な御爲ごかゝを仰やいますね、澤山御禮を御爲な、まだ〳〵それどころぢや

ないのよ、澤山々々、姐さんに奢つて貰はなつくちやならないことがあるんだわ、今ね、湖月の御座敷に出たんだがね、それは〳〵大騷ぎよ、お前新月のお袖といふ女中を知つてるか、と一人の御客がだしぬけに問ふじやありませんか、あゝ知てますよ、と何氣なく御返事すると、彼奴怪しからむ女だね、今湖月の女中の噂によると、何でも然るべき旦那か情夫かゞ有つて、其奴が桃月で遊んだのを、何處から嗅ぎ出したか、感附いたものと見えて、火のやうに怒つて、桃月にごなり込んで、しかと藝妓の名前を聞き糺してさうして美事に勘定を濟まして往つたといふじやないか、恐ろしい女もあるもんだね、と斯うなの、何んでも烏森邊は、姐さんの御話しで持ち切

りだつて、大評判さ。妾ね、何にも知らなかつたもんだから、あゝさうですか、と言つた切りで、惚れ返つて居たんだがね。一體眞實の事なの、』と文ちやんの問ふに、『あゝ全くよ、』と平氣なり。『それにしては、少と、仕打が穩當でない、と妾は思ふね。』と、相手の難打てば、『穩當でない位は、妾だつて知らないことはないけどもね、後日の見せしめ如件で、時々御灸をすえないと、御爲になりませんからね。』と、眞面目なり。『さう言つちまへば、それまでの話だけどもね、彼の方は大層陰氣な方だつてちやないか、そりや男の方だから、時々御遊びにもならうさ、それを一々女房氣取りで、責め附けた日にやあ、……まあさ御聞きよ、姐さんの氣性として、默つて

居られないのは、萬々御察し申し上げますがね、つまらない噂が彼の方の御身の上に立つても、面白くなからうじやないか、ちと、御慎みよ。』と、笑ひたげなり。

『はあ御親切は決して忘れません。』と、袖ちやんの嫣然ともせざるに、文ちやんも氣ぬけして、若や憤つて居るのちやなからうか、と察しも早く、向うの顔しげ〳〵と眺むれば、どうやら日頃よりも機嫌悪く、男勝りの氣性には不似合な歎息、思へば〳〵それも無理はなからう、同じ水商賣でも、藝妓となれば、苦もある代りには、樂しみもあり、偏倔の御客だつて、此方の腕さへたしかなれば、さ程の苦にもならぬ筈、何事も三つの絃に物言はせて、宜加減に御魔化せば、大抵の御客はでれりとする

奴なれば、譯もなくきやつ〳〵と騒いで、機嫌を取つたり、じらせたり、偶にはすねても見たりして、刻限來ればはい左様なら。後では舌を出すも、此方の勝手、隨分氣儘な商法なれど、女中となれば、さうは往かず、表向きでは藝者衆に、姐さん〳〵と貴まるゝやうなれど、これも女將といふ虎の威を借る狐士、隨分卑しき仕事までして、客には下げしまれ、藝者には困らせられ、右左より板挟みの、仲居とは能くいふたもの。聞けば、此の間も某とかいふ、辯護士の意地悪根性に、何やら此の家に遺恨を含むでの八つ當りに、他の女中衆は恐れ慄うて、顔出しもせざりしを、獨りお袖姐さんばかりは、何事も爲すがまゝに責めさいなまれ、火鉢を投げられ衣服を燒

かれ、あられもない悪口雑言、それさへ堪へがたきに、髪まで鷲攫みに、座敷中を引きづりあるかれ、艶鉾立見たいな眞似までさせられて、並大抵の女なら、人殺しの悲鳴をも擧ぐべきを、何事も愛嬌を賣る商賣なればこ、涙一滴飜さぬ氣丈者に、敵手も遂々魂まけして、心の中ではその度胸の据りしに、舌を巻いて居たこの話し。夫れでも女は矢張り女なれば、意地悪代言人の、ぶつ〳〵言ひながら、歸つた跡では、口惜しいこ斗り、かつぱこ伏して、泣き沈んでの愁歎、流石の女將も、染々感心して、手を合して御禮をおつしやつたさうな。あれ程の美貌こ腕こを持ちながら、かうした卑しい奉公勤めも、みんな思ふ御方への義理づく、今では廣い天地に唯一人を

頼に、往く末を樂しみ、辛い苦勞も嬉しき思ひに忘られて、まあどうかかうかその日を過ごさるゝに、杖こも柱こも思ふ御方に、浮氣なざされては、その心細さはどのやうであらう、思ひ餘つては、腹も立ち愚痴も出て、つい〳〵あのやうな事にもなつたのであらう、こそこはそれしやの察しもよく、思ひ酌みては、女性の涙脆く、聲さへ濕みを帶びて、『姐さんまあそんなにくよ〳〵思ふこはないわ、妾の考へでは、どうしても姐さんの思ひ過ぎこしきや思はれませんね、あの方に限つて浮氣の何こ、そんな事があらう筈がないじやないか、妾唯の一度しきや、御目にかゝらないのだから、能くは知らないけこも、大抵御氣象の程も知れ切つてるじやないかね、姐

さんにこんな御話するのは、釋迦に說法だけどもね、男は陰氣な人に限るね、どうも始がよくつて、餘り面白さうな方は、此方が玩弄にする氣なら兎も角、浮氣者で氣輕者で、からもう當てにも賴みにもなりやあしないね。妾だつて商賣だから、若作りに大化けに化けて、居るけどもね、もう彼れ是れ二十五の古狸、少しやちつとは世間も知つてる積りだわ。姐さんには、まだ內證だつたけども、妾もうこれで二度の御勤めよ、因果だわね。以前政子で鈴本から出てた時ね、銀座の方でちよい〳〵妾を呼んで、まあ少しは惚れたとか何とか、全くの浮氣でもなかつたやうだつたがね、馬鹿に活潑な面白い方で、それに男も立派だつたし、つい妾惚れつちまつたんだね。

その方がある晩ね、さう一と月も呼ばれた擧句だつたかしら、妾を呼んでね、おい政子、お前見たいな弱い身體で角力最負も聞いてあきれるが、一体能くこんな稼業が勤るねつていふからね、妾も癪に障つて、餘計な御世話だつて惡口つくこね、いやその餘計な御世話をしに今夜は罷り出でましたる次第で御座るつて、假聲か何かで以て、馬鹿に落ち付き拂つていふからね、何ですつて、と思はず問ひ返すこね、ごうだい一こつ、そんな稼業を思ひ切つて、奧樣に御成り遊ばす氣はないか、と寐耳に水の相談でしやう。なあに戯談だと思つてね、はいさういふ御方が折あしく賣り切れでございますのでつて、可笑しいから笑ひ出すこね、おい戯談じやないぜ、己れじや

どうだろう、と斯うなの、流石の妾も喫驚して、固より惚れた男の事だから、否應なしに二つ返事で、直ぐ翌日から御輿入さ。そいから一と月や二た月は、水の出花の若い同志、女中をのけては、たつた二人暮しの邪魔入らずだから、まあ痴話狂ひに夢を見たやうなものでしたね。すると、三月立ち四月にもなるとね、今迄遲く歸つた事のない人が、九時が十時となり、遂々十一時十二時にもなつて、時には泊つて歸る日もあるのでね、素人でない身には、察しもきく代りには、妬き心も強く、或る朝の事、今日こそ歸つたら、食ひついて、思ひ存分油を取つてやらうと、待ち搆へてるとね、なんだか玄關の方で、女中等ががや〳〵騷いで、腹をかゝへて笑つて居る

やうだから、どうしたのだらうと、何心なく往つて見ると、まあ驚いたちやありませんか、良人が還つて來て、玄關の敷居を兩手でさすつて、四つん這ひになつてるのよ。餘りの事に妾も可笑しく、貴君何をなさるんですと、責め付けるとね、「やあ奥さん、どうも、敷居が高くて、通れませんから、只今鉋で以て敷居を削つて居るのですよ。」と、まあかうでしやう。いかな妾でも、笑はずには居られないのを、じつと耐へて、奥座敷に通うて、且那が何を言つても、知らない振りをしてるとね、どうもさう御憤りなされては、手前甚だ迷惑に存ずる、思ひ存分打てたゝいて、御無念の晴るゝものならば、どうかこれにて御打擲遊ばしては如何でござるつてね、御頭を

下げて、何か妾の眼の先きに突き附けてるからね、おやつと思つて振り向いて見るこれ、まあ何時何處で買つて來たものか、子供の玩弄品の、紙で製つた、可愛い槌を見せつけてるんだわ、妾思はず吹き出すこれ、やあ御機嫌が直つた、さあ又もや御意の變らぬうち、湯豆腐で一杯、是非に〳〵、と手も附けられない。遂々此方が負けて、エ、またやられたか、と口惜がつても仕方がないから、その儘泣き寐入りこなるんだね。あんまり度々そんなことがあつて、面白いことはおもしろいけども、浮氣は已まないし、苦勞は増すし、エ、こんな家に居たつて、見込みのつかない賴み甲斐もない良人を相手にして、何の樂しみがあるもんか、それよりか藝者の方が、どの

位、面白いか知れやしない、と思つてね向ふから暇も出ないのを、此方から愛想をつかして、さてこそまた二度の御勤め、御免なさいよ。』と、勢よく語れば、喋り上手の話面白さに、浮かぬ顔も自から浮き立ち、時々は微笑さへ出るに、文ちやん愈々得意となり、銀煙管ハタと打ちて、『だから、面白い男といふ奴は、當にならないものさね。姐さんなんざあ、それを思ふと、ありがたいわね。あんまり愚痴をこぼすと、お前さん罰が當りますよ、唯の一度や二度、他の御茶屋で遊んだからつて、さう〳〵怒つてた日にやあ、御たまりこぼしがあるもんかね。難を言へば、内氣で氣ふつせいで、何だか澤山口數を御聞きなさらない處が、いけないと言へばいけないのだけれ

ど、そこにまた尋ねても望んでも得られない寶があるんじゃないか、それにまた、姐さんには大層惚れてるんだつてじゃないか、御馳走樣だね。』と、冷かせば、相手は矢張り眞面目にて、『なにね、惚れてるつてこともないんだがね、昔し馴染と躓づいた石は、憎いながらも向いて見るつて位なもんなんだわ。』と、澄まし切るに、『おや矢つ張り手ばなしの御のろけ、御馳走樣だね。堪らないわ、ホ、、、』と、上機嫌なり。折から、がら〳〵と俥の響き勢よく、御客樣ですよの聲朗かに、二重廻しの男入り來るに、文ちやんの早くも目敏く見つけて、『おや噂さいへば影こやら、御邪魔にならないうちに、ごりや御暇、左樣なら』の聲も輕く、身も輕く、すり違ひざまに出で

行く宵の月は雲に隱れて、鍋燒饂飩の聲も寂れ、身に泌む笛の音に、これも浮き世をはかなむ女按摩の、夜道を辿る影暗し。

その六

蕭然にふる春の雨に、露もたはゝなる、庭の海棠の、眠氣なるには引きかへて、六疊の一と間に煙草盆一つ置きて、たつた二人のさしむかひ、眠らるべきけしきはあらで、若きは默して俯せるを、叱るやうなる老いたる人の、言葉絶たぬその聲の冴えざるに、浮世のあはれも知られて、さても涙の多き世や。

『去年東京を、老の身ながら見物して、やれまあありがたい、自分の眼鏡が狂はなかつたと、嬉しい思ひをしたのも夢。また候、斯うして上つて來ましたが、花の都がまた見たいなぞと、上野淺草戀しさに、七十の老體かゝへて、はる〳〵の旅行は爲たうない。聞けばどうやらお

前の心が狂つたさうな、一人知らせ二人知らせ、三人手紙を寄越しても、まだよもやと誠にはしなかつたが、段段人の噂も聞いて、明け暮れの心遣いはこれ。二月このかた、手紙を出しても返事一通送つて來ないのは、どうしたもの、去年の冬、東京で別れた時、吾家の浮沈もも う眼の前に見えて居りますれば、此處暫らく獨身暮らし、節儉にこの身を固めて、少し斗りの餘裕でも父上の御爲になるやうに致しましやうほどに、何事も私の事は御安神なされて。と、くれ〳〵もお前のいふた事に僞りはない筈。その時のお前の心は、どうであつたか知らぬが、それをわしは誠にして、さて〳〵自分は結構な身になつた哩と、國に歸つては人にも話して喜んで貰ひました

が、今から思へば、それもこれも皆身の恥ぢ。殘念な事を仕て吳れましたのう。此地に來てからも、親子の間ながら、兎角に言ひ悪い話しなれば、今日言はうか明日話さうかと、腹の虫をじつとおさへて、つく〳〵樣子を見て居つたが驚いたのは今朝じや。東京に來てから、まだ委しい手紙も國元に送らぬなれば、と、お前の役所に出た留守中、卷紙狀嚢欲しさに、何氣なく机の抽出開けしに、不圖眼に入つたのが差押の張紙、これはと喫驚して、時も時なればわしも邪推深く、若しやと思へば心も躍り、簞笥の抽出又は書棚と、一々調べ見れば、彼處にも此處にも忌々しい張紙、餘りの事に腰もぬけて、ぶる〳〵慄ひながら、大抵の事には、いかに不自由しても、言葉は

かけまいと思ふた、あのお袖に聞けば、いかに何んでも、これぱつかりは御耳に入れて濟むことならば、と思ひましたのでございますれど、今更隱くし立て致しましても、詮なき儀でございますれば。と、逐一の彼女が物語りに、また喫驚。來て見れば、分財に過ぎた暮らしざまに、女房子のある身ながら、他し女を圍ひ置くさへあるに、何の恥かし氣もなく此處麻布の今井町、人通りも繁かるべき處に、物々しく表札掲げて、破廉恥とも何とも言はうやうなき、ていたらくに、多少の負債はあるべき位は、老の眼鏡に睨みは附け置いたれど、これはまた思ひがけない大金の大難題、今の有樣で察した處、連帶とはいへど、大方はお前が遣うたのであらう。それも尋常の金で

も借りる事か、話を聞いてさへ、はや生血を吸はるゝやうな氣持する、高利貸の鬼夜叉奴に、やうも〳〵頭を下げて、あれ程の金を借りたもの、今の腐つた根性には、何を言ふても糖に釘で、きゝめのあらう筈はあるまいなれど、わしは年は老つても男だけ諦もしますが、まあ少しでも、母の事、同胞の事、また家々の都合を想ひて、忌々ながらも國に歸つて、寂しげに兒を育てゝ居るあの嫁の事などを、想ふて見なさい。夫れは〳〵、みんなお前思ひ、朝から晩まで働き通しで、汗水たらしての百姓仕事もお前惡しかれと思ふて出來る事ではあるまい。唯の一日でも、お前の噂の出ない日とてはなく、長く便のないのも、大方は日頃からの負けじ魂から、勉強に餘念

ないまでのことであらう、こわしが上京するその日まで、露ほども疑はない親切は、親身で無うて世にある事か。今日の話しを知らせたら、さなくてさへ氣の小さいお母は、魄も身に添はぬ思ひして、若しや氣でも狂ひはしまいかと、筆持つ勇氣も出ないわい。』と、積りに積りし苦勞に、氣丈なれど、さすが老いたる身の心弱く、語る言葉に力は入れど、堪へ切れぬ思ひは兩つの眼より溢れ出でゝ、はら〳〵ここぼるゝ涙に聲濕みぬ。

『まだそれ處ではない、今日が今日とて、晝過ぎのこと、丁度お袖も外出、一人くよ〳〵物案じ、はかない思ひに胸はやきもき、夢路をたどるやうなる心地せし折から、頼むの一言に、はつと驚き、何氣なく玄關に出づれば、

「此方は執達吏、手前は債主、兼ねての差押への一件、御存知とも存ずれど、今日只今強制執行に罷り出でたり、申す迄もなく別に紛失物も御座るまいな、然らば。」とて、今にも競賣に取りかゝらむずる勢に、これは〳〵ご斗り、どかうの返事も出でず、驚かるゝよりは唯々呆れて、いふ挨拶も後や先き、「私は當家主人の父に御座りまするが、親子の間存ぜぬ知らぬ理はないとの仰せで御座りましやうなれど、實は悴の放埒が心にかゝり、上京致してからが今日でやつと三日目。何事も私には隠くし置きましたるため、強制の一件も今朝初めて差押の張紙にて承知致したる次第、今も今とて、その事の心にかゝり、唯々悴の歸宅を待ち居たる處なれば、法規の上から執行

さるゝに難はござりませねど、何を申すも主人は只今不在なれば、萬が一手違ひの事起りて、後で悔むやうなることありても留守を預かりし身のいかにも殘念でござりますれば、成らう事なれば、今一日の御延引をと、達ての私が願ひに、「はあ左樣か、然らばその由これに認めよ、」と公正證書を突きつけられ、何が何やら無我夢中にて、いはるゝがまゝになしけるに、猶ほ捺印せよ、この嚴命、折あしく印判持たぬ由辯ずれば、「然らば爪印致せ、」とのことに、否むこともならず、爪印押せし時のわしがこゝち、どのやうにあつたらう、とお前は思ふか。お前一人を便にして、ありし田畑の過半は賣代なして、無い物まで有る顔して、今日までの無理算段を、差引の勘定すれ

ば、祖先傳來の身代はもう皆無じや。子を知る親に如くはなしで、お前の氣象も呑み込んで居る私の事、一年や二年乃至五年の短日月に、まさか大身代になつてくれやうとは、望みもせねば出來もすまい。素こ〳〵大富限にしやうこて、全くの金錢望みに、お前を育てた譯でもなければ、よしや身代棒に振つたからこて、お前の心さへ確なれば、父子夫婦仲よく暮すに、何の難きことがあらう。一匹狂へば千匹狂ふこ、昔の譬にもある通り、お前一人の心から、吾家はもうこれまで。げにも壽長ければ恥多しこや、私も今年でもう七十一、古來稀なる長生きの、明日の身も知れぬ老體、御年に似合はぬ御丈夫な、こ、人は言へど、去年の暮れからごうも身體が弱うなり、

あの好であつた酒までが、飲めばごうやら咳が出て、以前のやうに甘うない。眼はかすむし、耳は遠うなり、近頃はまためつ切り痩せて、物忘ればかりするに、嗚呼年には勝てぬわい、ごうせもう長うない、こ命に不足ないだけに、自分の身には諦つけるほど、猶ほ子供のことが氣にかゝつて成らぬ。別してお前は跡取り、飲みたい酒も半分にして、育て上げた愛兒なれば、天にも地にもかげがへなき大切なる身の、若しや病氣でも起しはせぬかこ、お母この氣遣ひは唯是れ一こつ。昨日までも今日までも、氣が狂ふたこは知りながら、若しや深い考でもあつての事かこ、親の慾目にはまた格別の思ひ遣りもないではなかつたが、今日こいふ今日、愈頼みの綱が切れま

したわい、聞くも見るも恐しい公正證書に、老の爪印押しに七十まで長生きして三百里の長旅した事かと思ふと、何といふ因業な生れだらう、と、お前が可愛い程、この身が恨めしい。お前が卒業したあの時、嬉しさに轉りと往生たら、とつまらない愚痴も出るじやまで。何事も言ふて詮なきことながら、どうしてまああんな惡度胸の出來たものか、親はあゝは生みつけなかつた筈と今更他人のやうに思はれてならぬ。嗚呼々々それもこれも思へばこの親父がみな惡かつた。そも〳〵お前の生れた時、この子だけは教育して、と百姓風情に似合ひもつかぬ大望起し、止さつしやれ〳〵今に身代が潰れますぞ、と親類共の嚴しい諫めも、何を言ふかと耳にもかけず、一生

懸命に分に過ぎたる教育せしが、そも〳〵この身の過失、此度の事故郷に知れては、わしはもう故郷に居ることは出來ぬ程の面目なさ、あゝ口惜しい〳〵。』と、歎欷の聲高し。

その七

海嶽の高恩こいふも愚かや。親の大慈大悲には、比ぶべきもの世にありとしも覺えず。生れ落ちてより三十年、明け暮れの思はこの兒にのみ集りて、叱るも責むるも、何れ、慈悲の滴の露かゝらぬ隈もなく、己が命さへ惜しうないのなれば、身代田畑惜しからう筈もなく、家をも興し名をも擧げさせ、天晴れの人ともなさばと、唯その兒の出世を祈りて、己れは粥すゝりて蓆の上に寢るやうのこと、よしやありとても、親心のなんの〳〵、却てこれを譽れとなし、育て上げたる天下の學士に、さても見上げた男になつたの。と、心からの一言聞いても、親不孝は出來ぬ筈を、どうした天魔の魅入りしものか、

女には迷ひ、高利貸には責められ、己れ一人の不了見から、一家の亡ぶ斷末魔に迫れるに、親は猶ほこれをも自分の罪に着て、何事も親父の眼の狂ひしため、このありがたき親心には、戀も色も慾も覺め果て、あゝ何事も私が惡うござりました、御免なされて。と、心から悔ゆる言葉も出づべきを、何事ぞ、涙ながらの親の强意見をも、さまでとも思はぬ風情の若男の、煙草のみ燻らして、一語を吐かぬに、さすがの老翁も形を改め、襟を正し、少しは憤然したる調子鋭く、『これさ速雄、お前はどうしたものじや。あれほど私が口を酸くして話すに、一言も返答のないのはどうしたものであらう。さては愈性根腐りて、親を親とも思はぬ人非人になつたのじやの。さて〳〵

情ない身になつたもの、今日も執達吏に聞けば、役所の俸給まで差押になつたといふじやないか、一身の滅亡はおろかのこと、かうなつては一家内そろうて、乞食するより外はないのなれは、親子の縁はけふぎりとあきらめ私は今夜にも東京を立ちまするが、私もこれが一生の言ひ納め、親でも子でもない仲なれば、別にいふこともなからう譯なれど、切ても切られぬ血筋の親子は、よしや勘當の間柄になるとても、涙もあれば血も出る道理、一應聞いて置いても損はなからう。

そも〳〵今度の事、女房子供のあるお前が、それは勿論おもしろくないことも。あつて、別れ住居をするやうになつたので、あらうなれど、所詮は金のための紛紜に、

ごれさへ出來ればこの、云はゞ、金のための所爲事なさに、已むを得ざる東西の別れ住居。それをまあ有らう事か有るまいことか。あられもない、聞くも恥かしい風聞に、惡事千里を走るの諺もあればこ、氣も心もそゞろにて、上て聞けば下宿住居は遠の昔し、一月前より此處に家持ち、始めは女は女中奉公、辛い勤めもして居つた身を、餘りに噂の高うなるに、これはこ世間憚りて、今日この頃のこのありさま、別儀ではござりませぬ。こ、先程彼女の話し、一應合點は往きましたれど、考へて見ればこれも大馬鹿。それほど世間を憚るなぞこ、少しの良心でも持てる身が、どうしてまた仰々しいこんな住居が出來たものか。思へば〳〵、辻褄の合はないにも程があ

る。いふまでもない事ながら、若い時は二度無いものなれば、人生歡を爲す如何そなんごと、無法なる思ひに、附け元氣の勢ひよく、遊んで飲んで、歌うて醉うて、後先の考へ毛頭なければ、その日暮らしの無分別に、末は野ごなれ山ごなれと、自暴自棄にその身を崩して、藝者連にちやほやされれば、此上なき名譽と心得、眞面目なる職業は追々に厭ごなり、やがては家を亡ぼし身を失ふ例しは、古來珍らしい事にあらず。私も昔しは遊んだもの、吾が父の平八ぬし、まだ存命のその頃なれば、今よりざつと四五十年前、親父が西國切つての商賣上手に、金は轉がるやうに融通利けば、若且那〳〵の聲おもしろく、京は島原浪速は新町、到る處に持て囃さるゝに、此

方は馬鹿且那の何事も誠に享けて、昨日は芝居見物、今日は流連、夢現に遊び戯れしに、いつごなく深い馴染も出來て、思ひの外なる金遣ひの始末つかず。親人への申譯もなければ、手に手を取って夜逃げをなし、作州津山の山奥住居。僅かの貯へも段々盡きて、今日明日の活計にも困るやうになりて、こう〳〵綿打ちごまでなり下りて、大恥ちの面汚しを、いつしか親の聞き及んでの出迎ひ。女ごはそれつきり斷然別れたのが、この身の仕合せ。それよりは初めて夢の醒めたる心地に、仕事を勵みて、どうやらかうやら親父の跡繼ぐ身ごなりしが、誠や子を持て知る親の恩、證文を唐樣で書く三代目の譏文句を、今眼の當り吾が子に見る憂き目も、思へばこれも巡

る因果の、當時の不孝の罰當りかと、長生きする程世間が恐ろしうなつたわい。聞けば今の婦人、どうやら古馴染であるさうな、燒木坑の何こやらで、どうぜ末は腐れ縁の、切ても切られぬ惡因縁と、わしはちやんと察しても居るが、そこを思ひ切るといふのが男の意氣地。女のいふこと斗り可し〳〵と聞いて居るばかりが、大丈夫ではなからう。此道ばかりはどうしても思案の外で、本人同志の心意氣一こつでは、親が何と言つても仕やうもやうもあるものではなけれど、世間普通の親御のやうに、察しも思ひやりも露更無い沒義道な事は、わしは言はぬ積り。どうかまあわしの言ふことを、腹も立たうがしかと耳に入れておくりやれ、のう。それなら、どうしてま

た、あの婦人と同居しては惡いかと、惚れ合つた仲では非難も出やうが、それそこじや。若い同志の世渡りでは、自分が思ふまゝの勝手な暮らしさまに不都合はなからう、と自分だけに都合の宜い理屈を附けて、世間の難しやは、皆な馬鹿に見えるか知らぬが、これがそも〳〵の大間違じや、惚れ合つた同志が、思ふやうに夫婦になれるものなら、海にも川にも波風は起るまい。あの蜑女の燒く火の鹽煙りを見なさい、思はぬ方に靡いて往くも、浮世の風が吹くからじや。どうも思ふやうに往かぬが世の中、と大抵相場も定まつたもの、まあ考へても見るがよからう、お前には既に歷ごした女房もあれは子もあるではないか。たゞへそれがない昔と定めて、獨身暮らしの

氣樂者にもせよ、浮氣稼業を商賣に、よしんば半年でも一年でも、その身を弄んだ者をば、これが拙者の女房じやと、美事名乘りを上げて、面出しの出來るものか出來ないものか。世の中には義理といふものもあれば、道といふものもあらう、ましてや此上無しの高等教育さへ享けて、何不足なき身分にもなり、勿體ない位どやらにも叙せられながら、藝者風情を妻にしたとあつては、お前一身の立ち難きは固より、引いては一家の名折となり、お前の大恩受けし學校の名前をも傷け、先生方の御迷惑、はた、いかばかりと思ひなさる。君と共なら味噌漉提げてもとは、やけ酒飲んで身を棄てばちの、お茶屋か待合かの小座敷にての捨て臺詞なら、いかさま意氣にも粋に

も見えて、芝居にて見る花道の、優長なる道行き振りに、じやらつきあふたる仇面白さ、必らず見棄てゝ下さんすな、何の見棄てゝよいものかと、互に見交す眼と眼には、色戀のけて苦勞はなけれど、さて實際の味噌漉提ては、さうはゆきませぬ。苦勞に苦勞を重ね合うては、追々に身が詰りて、心弱ければ恐ろしい無分別して、末は後悔の口惜し涙に、淺間しい最期を遂ぐるまでの事、お前も三十となれば、世間並ですら分別男。少しは思慮も辨へもある事と、思はぬこともなけれど、迷ふた目には世は闇黑、書物は讀めん私なれど、世間の事には私が上手。思ふた事を皆言ひましたが。どうかの、斷然思ひ切る氣は出んかのう。』と、憎いながらも、吾が子の往く末見るや

うなる淺間しさに、不憫も加はりて、もしや心の改まることもやと、萬一を冀ひて、親切なる父親の言葉優しく問ひかくるに、相手は矢張り口喰ひしばりて、一語を出さゞるに、流石の父親も、赫として、「宜しい能く分かつた、あれ程事を分けての親の頼みにさへ返事の出來ぬは、何處までも彼女と添ふ氣じやの、今日只今親子の縁は切りましたぞ、あゝ七十の老人が態々上京したのも、さては無駄足になつたかい。あゝもう愚痴も言ひますまい、涙もこぼしますまい。他人となれば寸時もこの家には居られぬ義理、それでは御暇を致しましやう。あゝもしお袖さんとやら、只今の私が話しを御聞きか、お前さんには隨分氣の毒な物の言ひ樣、嘸や腹も立ち、怨めしうも

あつたろうが、これが浮世じや。私が思ひは挺でも動かぬのなれば、悴の心に動きが無い以上は、殘念ながら親子の縁もこれ限りと、私も胸を定めました。三四日とは言ひながら、大い御世話になりましたの。』と、何氣なく挨拶述べて、小さき包みを抱へ、何事にも氣早の老の一徹、はや玄關に立ち出るに、女は唯うろ〳〵、見送ると もつかず跡追ふて、これも玄關に出れば、老翁の今や杖手に取りて、此方眺むる双眼には、百千色の苦しき思を保ちかねて、はら〳〵と涙こぼるゝ痛はしさに、此方も覺えず胸刺さるゝ苦しさ覺えて、悲しさ遣る瀬なく、さてはかつぱと臥して、忍び泣きに泣き頽ほるれば、老翁はやう〳〵に涙おし拭ひ、後髪引かるゝはかなさを

忍びて、一歩は輕く一歩は重く、己が涙ども見らるべき春雨に、傘さへさゝで、屠所の羊のそれならなくに、子を思ふ闇の心に身も立ち縮み、振り返りてはまた振り返りながら、門口を出で行く瘠せたる翁姿の、花見る人の影に隱るれば、家には男の何思ひてにや、遽かに起き上りて、門口まで走り往きて、見送る眼よりは血の涙も出でなむばかり、はら〳〵と迸り出る雫を止めもあへず、兩手を合し後影伏し拜み〳〵て、濟みませぬ〳〵も心の中、身も消え往くやうなる思ひの、倒るゝやうに玄關に歸れば、はたと往と合ひし眼と眼に、またもや涙催されて、共泣きのあはれも增して、『妾見たいな者にあれ程までの貴君の意地立、勿躰なう御座りまする。』と、女の泣けば、『因

果だね。』と、男は歎きて、内も、外も、老も、若きも、吾が心からの憂き世に、思ひ〳〵の涙晴れ間なし。

その八

照りもせず、くもりもはてぬ朧の月に、都の花は、ひとつに匂ひたる夜のけしき、なまめかしうゐめやかなるおもしろさを、一刻千金の價惜みて、吾も〳〵と浮かれ出る老弱男女の、何れも一こつ思の花見衣、裾飜へして月にあこがれ、憂き世忘れて面白やの聲をかしく、さゞめきあふ春の宵に、興深かるべき思ひも起らで、月も嬉しからず、花もをかしからざる心の煩悶に、出るものは歎息の聲ばかり。孤燈のもとに影暗く、頰杖つきての物思の、胸は千々に亂るゝなるべし。

『彼女が新橋を立てから、もう彼れ是れ十日、大阪に無

事に着いたことばかり、その後の便りがないのは、どうした譯であらう、さぞや〳〵彼れ是れの遣り繰りに、心配をして居るのであらうとは思へど、もしや女の狹い心から、無分別の事でも仕はしまいかと、氣掛りでならぬ思へば半年に餘る月日の、顧れば樣々の移り變り、折角便りに思ふて、寄りすがられた自分は、己れの心からと言ひながら、地位は無くなる、身代限りはするし、剩さへ彼女の着物迄競買に附せられ、二人共丸裸となつた曉き、日頃より親友だの、無二の知己だのと、腹心うち明けた友達迄、今日の零落に見向きもせず、陰では舌を出してざまあ見ろと、冷笑してる奴ばかり、先月の月拂ひの、どうしても才覺つかぬに、こう〳〵家主からも愛想をつ

かされ、出て往けがしの悪口雑言、酒屋の小僧等にまであられもない侮辱を享けたるくやしさから、「もう〳〵どうしてもこの家には居られませねば、一應小さい下宿にでも、暫の間御身を御ひそめなさりませ、妾もまたこんなにして暮して居ましては、飢死するより外はござりませず、炎天干しの雨曝しも氣が利きませねわけなれば、大阪の知るべを便りに、あなたの御身の立て方も、何こか相談して參りたうござりますれば、今日より十日ばかりの御暇を戴きたうござりまするが。」と、涙ながら彼女の語るに、己も染々浮世のあはれを覺えて、「許してくれ、許してくれ、おれひとりの意氣地なさから、お前にまで思ひかけない苦勞をさせ、今また身に餘る大役を背負はすこ

と、眞以て男の立たぬ譯なれど、己の力では今の處手足の出る工夫もなければ。」と、即日相談定りて、彼女は新橋をその夜出發、己れはまたその時よりのいぶせき下宿住居、どうやら夢を見たやうな氣持ちもするが、過去の事も今の事も、凡べて不思議でならないやうな思ひもする。あの緣あつて連れ添うた女房や子供、もと〳〵憎うての別居ならねば、折々は思ひ出しもするし、可愛想なと考へぬ事もないが、どうしたものか、今以て己れは後悔といふ念が出ない。並み〳〵の男なら、小説等にも能くある奴、落ちぶれ切てはその身の非を悟りて、「あゝ己れが悪かつた」この一言に、前非後悔のしるし見えて、親も喜び子も躍り、つながる緣の人々まで、やれまあ夫

れで、と胸撫でおろす例し、これぞ世の習はしとも見ゆるに、己れだけはどうしてもそんな念が浮かばない。あの御年寄られし親父様の強意見の時ですら、言はるゝところ皆御尤も、寸分御無理はないと合點しながら、夫れは己れのやつてる事とは全く別の事でゝもあるやうに思はれて、私が悪うございましたこの一言は、どうしても口へは出なかつた。夫れでもさすがは親子、これがもしや別れになるやうな事もと、愈々玄關に出られし時は、何ともいへぬ思ひ胸を衝いて、今迄の自分の仕うちには非を打たぬ身ながらも、親の心のどのやうにあらうと、向ふの氣を察したとでもいふやうな氣持に、子としてはまこと濟まぬわいと、思ひ出せし時は、矢も楯もたまら

ず、親なつかしく、つい〳〵ほろりとなつたが、今で思へば、自分で自分の心が別らない。世間の奴等の意見がましく己れにいふ處が、またどうしても己れには合點が往かない。「君は前途有望の男ではないか、教育を享けたる男ではないか、それがまあ醜業婦などを女房にして、世に立たれると思ふか、言語道斷の話しじやないか。」と、口を揃へたやうにいふやうだが、あれ程理屈の合はない言はないと己れは思ふ。藝者だの娼妓だのが、醜業であるか何であるかはそれはさて置き、藝者が藝を賣り娼妓が身を賣るといふも、夫れが藝者の罪となり娼妓の罪となる理屈はない筈。誰しも好んであんな稼業に身を沈める者があるものか。何れ親のため、夫のため、今日明日の

活計に困りて、涙ながらの憂き別れ、身を斬るやうな思ひして、人千倍の苦勞に、生命捨つるよりも辛い勤めに、二つの袖の乾くひまなき涙の雨に、その日〳〵の立ち往くあはれさ。罪なくて配所の月を見るとか言ひけん昔の大臣の思ひは知らず、天下幾千の美形の、何れか罪なうしてはかなき月を見ざるものあるべき。吾れや難き、人やつれなき、種々の氣苦勞して、瘠せ衰へし思ひを隱くして、心で泣て身で笑ひ、百人千人同じなみに媚を賣るあはれさを、泣いてやる男幾何ぞ。何事も社會といへるものゝ罪なるべきを、その人におつかぶせて、石のやうな冷かなる物の言ひやう。げにもかゝる男の頑桁、美事たゝきわつて遣りたし。世の人の大方は、貞操とか何と

か、恐ろしき名前つけて、女の生命は唯これなんめるをと、しかつめらしき理屈つけて、水商賣の藝人原に惡口つけど、彼等のいふ貞操ほど譯の分らぬ者はあるまい。見よ〳〵水商賣ならぬ歴とした嬢樣達の、學校通ひ、やれ、家政法の外國語のと、近代教育に何不足なく、美々しき履穿ちたまひ、日本婦人のあられもない外輪歩み、天晴れ蝦茶式部の御稱號いかめしく、大抵の男は自分の夫にする程の價値がないやうな御顔つき、いかにも御結搆なれど、陰に廻つて聞けば驚き入つたる御品行、玄關番に秋波をおくり玉ふもあれば、さては馬丁との駈落の噂も、まんざらの僞でもないやうなり。古本屋をひやかし玉ひては古今集遠鏡など御買ひ遊ばす御ついでに

は、何々造化機論とやら、博物學研究の思し召しかもしらねど、手に取り玉ひ、鶯の鳴くやうな御聲にて、げに蛇喰ふと聞けば恐ろし雉子の聲、これはいくらとの御仰せ、袴はづかしき風情ぞかし。未來の良人撰みに話は絶えずして、理想だの家庭だのと、ほんの一時の御議論も、やがては嫁入り前に御實行。身も心も汚れ腐つた御身分にて、虫も殺さぬ御容貌の御結婚、處女も能く出來たもの。天下初婚の令夫人達の、げにも俯仰天地に恥ぢざる御方の、そもや何人在すことぞ。思へば〳〵、表と裏とある世の中なればこそ、何事も太平無事、知つても知らぬ顔する男の辛さは、どのやうにあらうと少しでも思し召せば、御轉婆も宜加減に御止しなされ少しは良人大事

に、溫順く御成り遊ばすべきを、日本夫人の龜鑑は、自分ならでは外になきやうの御振舞、昔の秘密さらげ出さば、婦人會にての御演說も、二枚舌の大罪犯し玉ふ不屆者の雜言とやなりぬべし。時々の御芝居見物には、少年役者に現をぬかし、御手拭から御はんけちから、御紙入はいふに及ばず、御頭の御飾りまで、夫れ〳〵贔負役者の定紋付き、仇つぽいその面影は、常日頃にても、御懷にての溫かい御介抱、親御の御墓參にはこかく御ぶしやうなる御脚も橋塲なる助高屋の墓見物には少しも弱り玉はぬ不思議は己れの知れる奥樣に、幾らもあること、情なき世とは是なり。世間は何も知らぬと思ひてにか知らねど、あんな顔で貞操論もあきれかへるじやないか。そ

れに引き比べては、藝者といふ奴なぞは、存外に無邪氣な者さ、日ごと夜ごとに通ふ客に、愛嬌ふりまく商賣ながら、それも云はゞ、鸚鵡囀り、金に困れば、身も賣らうし、口も賣らうし、手も賣らうなれど、心ばかりはいかなこと、自分の思ひ一つにて、この男ならばと能々の見定めつかねば、心から底から、惚るゝといふこと滅多にあるべきものにあらず。浮氣商賣の萬に外觀を張る身なれば、偶には俳優落語家又は力士と、浮き名立つる噂はあれど、それはほんの一時の慰み、存外に世間の思ふほどの浮きたる根性持たぬが、不思議に似て不思議にあらぬ證據には、一旦堅氣になつた藝妓達の義理堅き奴を見ても判る筈なり。身は賣ても心は賣らぬといふ言葉

は、げにも彼等が一生を現はして、玲瓏玉の如きものと己れは思ふ。一寸考へた處では、隨分矛盾極まつたやうにも見ゆれど、そいつの了解のできぬやつは、何れ蓄生同樣、人間の味知らぬ大たはけなり。一旦人の女房になりながら、猶ほ浮氣の已まぬ奴もないではなけれど、それは藝者の身分知らぬてんつる女、てんから御話にならぬ馬鹿なれば、藝妓界にての面汚し、三味線にてたゝきなぐつて、此の世の暇遣はすまでの事、世の中の妻といふ者、これとは全くうら腹にて、心は賣ても身は賣らぬ下司根性の奴ばかりじやと、思はるゝも、己れの俳目ばかりでもなからう。自分の亭主を側に置きながら、仇な意氣な樣子の善い御客を見ては、遽かに亭主の惡口いふ

て非難を入れ、表向きは良人大事の可愛さにいふ言葉のやうにも見ゆれど、心のうちの大膽はいはぬが花の大不心得、あの男と夫婦ならばと、思の色の覺えず穂に出る例し、珍らしからず。身だけは世間の義理といふやつに責められてのしやうことなさに、形ばかりは亭主に任せて、比翼連理の枕ならべながらも、心は常に翼を生やして、何處やらへ遊びあるくは、お孃樣上りの奥樣の御持前かと、思はるゝほどだ。夫婦といふも名前ばかり、眞の戀愛露起らず、心の往くへを尋ぬれば、浮き草やけふは向ふの明日はこちらのと、その日〳〵の出來心、花の色の移ろうにも增したる變りやうに、何で面白い事があらう。男にもまた不了簡な奴が多い世の中、藝妓風情の奴

原は人中には置けぬものと、手嚴しくのたまふ方々に限りて、道往く傍の得ならぬ芳香には鼻うごめかし、もし貴君と聲かけられては身振ひするほど嬉しがる分の事、風俗改良の何のと、藝娼妓のみ風俗を亂すらんやうにやかましく論じ玉ふ御方々の、宿屋に歸り玉ひては、彼女を呼べと髏にての御仰せ、可笑しき世の習はせかな。かういふ世間の眼から言つて見れば、己れが今日のふるまい、隨分馬鹿にも見やうなれど、己れの落ちぶれたのは己れの仕業、お袖を怨むごころ毛頭なければ、畢竟は今の社會に容れられぬ自分の氣象から出來た事、飢ゆるも死するも辱かしめらるゝも、自分の了見で自分が思ふことしたまでの事なれば、この位俯仰天地に恥ぢざるとは

ない、吾等ふたりのための天地と思へば、愚かなる奴等の言葉なぞ、齒牙にもかけぬが男であらう。なあに歎くこども、思ふこども、あるものか。』さまざまの思ひに心は車輪の如く巡りて、止め途もなく、思はぬことはいへど、その情婦の事のみ思はれ、途往く人の徵醉機嫌にて、中音に唸る追分の聲をかしく「君と寢よか五千石取ろか何の五千石君と寢る、」と歌ひ過ぐるに、情かしさ已むことなく、何故ともしらず悲しきに、越し方往く末の果かなさもあり〳〵と浮かびて、涙ぐめるおりから、ハイ郵便書留ですよ、と女中の重々しき手紙持ち來れるに、ハッと驚き、手に取り上ぐれば、『出見速雄樣、袖より。』見詰むる顏は花のやうにかゞやきて、手紙持つ片手はわな

〳〵こうちふるひぬ。

その九

一筆申上り〳〵。その後はさぞかし御さびしき御くらしと、夜こてもひるこても、たゞ〳〵お前様のこゝのみ心にかゝり御姿あり〳〵ご見へるやうにて、毎日〳〵わたしのたより御待ちなされたことであらうと思へば、氣も心もそゞろにて、もしやわたしを御怨みでもなさりはしまいかご涙ばかりこぼれ申候。まこゝに水のながれと人のゆくすへほど、はかられぬものは御座なく、御わかれしてよりわづか十日のその間に、わたしの身のさま〳〵のかはりやう、御耳に入れては、さぞや〳〵びつくり遊ばされ候ことゝ、さなきだにまは

らぬ筆のひとしほにぶりて、かなしさに胸せまりて、長々しき文句もあこやさき、心に思ふ萬一も書かれませねど、何事も唯々御察しくださいまし。さてこや八日の朝新橋にて御別れせし時は、一時も長く、滊車の出ないやうにと、祈りしかひもなう、けたゝましき笛の音に左様ならの御挨拶もろく〳〵得いたさず、御見送りくだされし御顔も涙にくもりて、はき〳〵こは拜まれ申さず、大事にせよとの御言葉のみは、貫くやうに、わたしの耳にのこりて、ありがたいやら、かなしいやらで、滊車の窓より首さし出しても、御姿はもはや見えわかず、唯々いそがはしく、はんけち、うちふり玉ひしを見し時は何ともいはれぬ悲しさに、そのま

まうち臥して、涙は瀧の如く流れ、袖うちおほひて、泣き沈み大磯までは、顔をも得上げず、絶え入るやうなる思ひいたし申候。その時ふと思ひ出し、あゝさうじやと氣がつき、しんげん袋よりお前樣の御寫眞とり出し、人知れず眺めては、またも涙にくれながら、わたしは決して〳〵一人で旅をするのじやあない、戀しい御方とさしむかい、何ではかないことがあるものぞと、獨りで心をなぐさめ候ひしが、人目しのぶ身の思ふやうに御面影拜まれぬに、じれつたくなり、御寫眞をば、わたしのふところに入れて、どうやらうれしいやうな思ひも起り、旅のつれ〳〵もいさゝか心安く相成り、大阪までは、かた時も、お前樣と肌身はなれぬ

なかよしにて、參り申候。その夜十一時まあ〳〵無事にて大阪に着き、この以前泊りし土佐堀の宿屋に參りて、やつと心落ち着き御湯に入りて、御飯もよういたかず、すぐさま寢床にはいり候へども、どうしても眠りつかれず、唯々お前樣のことのみ、心にかゝりて、あゝ今頃は、もう御休みあそばしてか、今までにない御獨りずまゐの、どんなにか御寂しからうと、ひたすらに御側なつかしく、またしても涙の絶間なく出るに、きのふまでの、苦しいなかにも仲よく暮らしたるうれしかりし事ばかり思はれ、ほんにまあわたしは長い長い夢でも見てるのじやあないかしらと、色々さま〴〵の思ひ起り、頭は割るゝやうに痛みて、心苦しさ限り

なく覺え候。をりから誰やらわたしを遠方から呼ぶやうなる聲いたし、ハッとびつくりして、振り向けばどこやらお前樣に似た面影なるに、二度びつくり、まあうれしや〳〵と、氣も心も飛び立つやうに、聲する方へ往けば、わたしはいつしか、櫻の花の咲き匂へる岡の下に居て、お前樣は小川越しの、向ふに御出でなさるゝに、小川なれど、女の身の飛び越すこともならず、聲を限りにお前樣の名を呼べば、お前樣もわたしの名を呼びたまひ、聲だけは互の息さへ聞ゆるほどに、近うひゞくうれしさ。その時お前樣のこちら眺め玉ひながら、お袖〳〵もうおれは死ぬるぞお前に別れてから、にわかに大病起り、もうけふあすも知れぬいの

ち、どうぜ死ぬるほどならば、今一度お前に逢うて、今までの禮いふて、と己れの思の一心に氣を引き立て、かうしてまあ杖ついて來たが、もう息苦しくて物が言へないと、思ひがけないお前樣の御言葉、エッとわたしびつくりして、氣も心もはやてんごう、何の女の一心飛び越えられないことはなからうと、裾ひつからげて兩脚に力入れて、やつと飛べば向ふの岸には達きませず、踏み誤つて散る花と一所に、小川なれど、瀨あしの早きまんなかに、ざんぶとばかり、落ち入つた刹那アレェと苦しき一聲に、ハッと夢醒むれば、死んだと思ひしわたしは、ひや汗全身に流れて蒲團の上にこぶしをにぎりて座り居れるに、はかないやら苦しいや

らさびしいやらにて、身も世もあられぬ思ひ致し、そのまゝ夜着にかぢりついて、苦しき一夜を泣き明かしました。九日の朝には、これではならぬと、引つ立たぬ氣を引き立て、かねてお前樣に御話し致せし昔しなじみのねえさんを、中の島に尋ねしところ、ねえさんもおどろき、苦勞ある身とは知らねば、まあ御上りと、喜ばるゝほど、尙心苦しく、やう〳〵に話しの糸口見つけて、實はかやう〳〵と一伍一什を話し致せしところねえさんも途方にくれ、それはまあお前さん大變じやないか、友達がひには、こんな時こそいかやうにも相談相手になつてあげたいが、何を言ふても、男ひとり女ひとり、沈み行くふたりを救ひあぐるのなれば、事

によつたら一人は助からないかも知れないよと、ねえさんの言葉にわたしもぎつくり。どうしてもそれより外には仕方がありませんかねえと、わたしとひ候處お前もねんねへじやあるまいし、大抵分り切つてる事だあね、お前さんいゝかげんに、その方に見切りをおつけなねえ、だけどもね、恩もあり義理もある方だから、それつ切りにしてお置きさいふのじやないよ、お前さんはどうせすたつたからだとあきらめつけて、どうだらう、またこゝの廓へ身を沈めては、なあに浮世はつらいやうで樂なものさ、七たびころんで八たび起きるつてじやあないかと、つれないやうでもやはり友思ひの親切なるねえさんの言葉を聞きて、わたし何とも返事

出來ず、たゞ涙のみ、こめごなく出で候へば、ねえさんも氣の毒がり、まあ直こ返事も出來まいから、一應宿屋に歸つてゆつくり御考へよこの言葉に別れて、さてその夜獨り寢の、またもさびしき物思ひ、もしねえさんのいふやうに致せば、お前樣のさぞや〳〵御不本意、賴みがいのない女こ、御さげしみも心づらく、いや〳〵ごうしてもそんなことはすまいこ思ふ矢先きから、外の善き分別つきませぬ辛さに、こう〳〵その夜を泣き明かし、またもねえさん尋ねて、ごうしても心の定らぬよし話し候ひしに、そんな度胸でごうなるものか、わたしもう知らないよこの愛想づかし聞きて、わたしも泣く〳〵、胸を定め、何事も賴み入りて、實

は一昨夜よりこゝの廓に、惜しからぬ命ながらへる身ときまり申候。さて〳〵不甲斐なさやつこ、お前樣の御腹立ちも御無理ならぬことゝ、御身の上を御察し申しあげては、いつそのこと舌かみ切りて、あの世へいつた方がこ思ひましたほどなれど、何を申すも、せつぱつまりし二人の身のうへ、お前樣さへ御達者に御暮らしなされて、今までのお名前御もごしなされさへすれば、わたしの身はいかやうになり候ても、露いこひ申さず、わたしもだん〳〵年をとり花盛りの齡過ぎてのこの商賣なれば、こてもむかし長崎にて勤めしほどの氣象も意地も出やう筈もこれなく、ごうかかうかまあ無事にその日を送り申せば、それこそ思ひも及ばぬ

身の仕合せと存じ居り候。こてもく〳〵またここの身のめでたく浮かぶ時節はこれあるまじく、かくてはこの身はこの世には亡いのも同じなれば、ごうぞく〳〵わたしのことは御思ひ切り遊されて、天晴れの御出世をねがひ上げう〳〵。風のたよりにてもお前様の御噂聞くこともあれば、これのみをこの世にての極樂と心得、朝にも夕にも、たゞく〳〵お前様の御幸福のみ、神にも佛にもいのり上げ候ほかは御座なく候。これは他人の御話しなれど、わたしの隣りに勤めする妓、先月以來病氣にて、ぶらく〳〵いたせしが、どうしても全快致さず、まゝにならぬ身の上ほど、なほこれを心配して、見る影もないやうに、やせ衰へ、ほんに氣の毒とも何とも

いひやうなく、わたしも此家に參りし日より、今のわが身に引きくらべて、人一倍憫れをもようして、それに隣り同志なれば、早速御見舞ひ申せしに、聞くも語るも、涙の種にて、どうしてまあこんなによく似たはかない人もあるものかと、互に手に手を握りしめて、歎きにくれましたが、今朝も七時ごろ見舞ひに往て、その名を呼び申せしに、更に返事なく、さても能く寢入つたものと、傍に寄り添ひ、何氣なく、かいまき推しあくれば、返事なきも理り、敷布團一面紅に染みて、われとわが喉に剃刀つらぬき、息絶へ果てたるしまつに、さすがのわたしも腰がぬけ、大聲に呼び立て、やがて此樓の大騒ぎとなり、みな〳〵涙をこぼして、何

れは吾か身の上と歎きて、あはれさ限りなく、線香立つる手もふるひ申候。隣りの間に居てさへ露知らなかつたのも不思議なるに、初めてわたしが見出し候ゆゑ、わたしだけは嚴しく御上の御調受け申候へども、何事も無事に濟みてのち、その妓の母親も參りて、また愁歎の絶間なく、能々話し聞けば、義理ある人には義理が立たず、義理なき人よりは義理を責められ、病氣にさへかゝりての、この世居づらさに、思ひ切てのあの覺悟と、母親のくやまるゝを思ひ合せば、てつきりわたしの身の上を云はるゝやうにも覺えて、もしやあの妓かわたしの身代りに死んでくれたのでばなからうかとまで、思ひつめ、なほ痛はしさ増して、人事とも思、

はれ候はねば、眞心こめてあとのとふらひ致し申候。世の中のことはあれもこれも不思議づくし、この後のわたしの身もいかやうなる憂き目に逢はむも知れ候はねども、この世を棄てたる思ひには、何事も覺悟極め居候へばわたしの身をばくれ〴〵も御氣遣ひくだされまじく候。

別封金六百圓、今日の御間には合ひ申すまじく候へども、これはわたしの生命とも心とも覺し召してせめてもの御心遣りに、何か御身の立ち往くやうなされ、昔の御氣象美事に、一旗御擧げなされ候へば、わたしは死しても恨みはこれなく候。何事も因緣事と御あきらめくださ候て、心を廣く氣を大きう御

持ち遊されゝくれ〳〵も御身御大事になされ、百年も千年も御長壽のほどを祈上り〳〵。申しあげたきとは濱の眞砂の數盡され候はねど、一句かけば涙こぼれ、一行かけば筆ふるひて、あやめもわかぬ水莖の跡いかにも見苦しく候を、いかにしてかこの思ひ書き悉され申すべきよろづは御察しくだされたく候。

あら〳〵かしく

五月十八日　袖か

速雄様

また〳〵書き添へ申候。お前様よりたまはりし御寫眞と指輪とは、決して〳〵かたみこそ今は仇なれとは、思ひ申さず、これありてこそ辛い勤めもなんの

そのこの勇氣も出で申候。わたしのいのちの息通ふ間は、しばしたりとも肌身はなさぬ品に候へば……もう筆が動きませぬ御ゆるし被下度候。くれ〳〵も御身御大切にあそばされ度候。これのみをいのり上げ〳〵

その十

長々しき文讀める速雄は、四五行讀みし頃より、はや涙ぐみて、燈ぴの暗きをもどかしがりて、身もふるひ心もふるひ、讀みゆく心地、血を吐く思ひはこれなるべし。世の中の事、大かたは思ひがけない事のみなれど、これはまた大變なる意外の出來ごと、辛い勤めも卑しい商賣も、思ひせまつてのことゝはいひながら、畢竟は男可愛さからなれば、その心を察しては、女ながら足も西へは向けられぬ道理、忝いとも勿體ないとも、御禮の言葉さへ筆にも口にも出ぬほどのありがたさ、わが身を棄てゝ男大事の思ひ切たる諦めやうは、天晴見上げた貞

節心。泣くよりはたゞ驚かれて、やがてはうれしい思ひもする下から、どうやら物足りない心地するに、速雄は二たび三たび四たび程も文くりかへし、讀みもて行くうち、見る〳〵眼中血走り、銀行手形づだ〳〵に引き裂きやがては心こめたる文さへ嚙み切りては嚙み切り、無念の相形恐ろしく、「エ、殘念な〳〵、己れの身がよしや立つたからとて、この身ばかりの立身出世が何になる事ぞ、可愛き女を苦界に沈めて、己れのみが榮曜榮華、それが何の譽れぞ。死ねば共にと覺悟極めし身なればこそ、今迄の苦勞も恥辱も空吹く風と聞き流がしゝが、今となつてはもう及ばぬ望み。あれもこの世を棄てた心なれば、己れも身を棄て心を棄ていでどうなるものか。金子六

百圓、今の己れが眼からは、塵芥ほどにも役に立たない。あゝ〳〵心込めての彼が親切、己れにはこれが却て怨めしうなつた。あゝ己れも愈々この世に愛想が盡きた、今日といふ今日、己れは始めて世を悟つた心地がする。あゝ善いこゝろ持ちになつたわい、あゝ三十にして立つと孔子樣は曰つたが、己れは三十で佛になるか。面白いぞ〳〵、かういふ時はどうしても例のビールだな、』と、忽ち破顔一笑して、急がはしく手を拍てば、『御用で』と、女中の來るに、『おい急いでビールを十本持て來い。』……

* * * * * * * * *

その翌日の東京新聞には、法學士の自殺と題して、二號活字の人を驚かし、二三段惜し氣もなく、詳かに記せるもありしが、自殺の原因に至りては、何れも異口同音。『女に迷うて、高利貸に責められ、糊口に困りて、女に逃げられ、とう〳〵世を果かなみての無分別。天下幾萬の人々よ、これを讀みても、その身慎むべし、恐るべし〳〵』と結びける。

越えて一日勘當せしといへる父の、學士の嫁と子供とを連れての上京、泣く〳〵葬式なしけるに、從七位出見速雄之柩の九字貴げなるには引きかへて、供せる人のいかにも少なく、位牌持てる五歳の女兒の、涙ぐめる老翁の膝の上に、嬉々と笑ひて、棺のあとに隨へるが、見る

人の心を動かしたる噂の、かれこれにひろがりて、青山墓地の新塚の、死後の譽れか辱かしめか、夜なくこゝに訪ひ來る女のありとや。

（をはり）

あらひ髪の卷尾に

丸髷は重くるし、島田は不好なり、束髪は堅くるしとて、洗ひ髪のまゝを夕風にそよかせ、世は浮橋の袂涼しくさまよへば、そもや人は何とか見るらん、ひつかけ帶の婀娜めかしく、浴衣の染も色淺からず、富士額雪を欺き、白き齒の玉に擬へば、水の流雲のゆきかひにも、迷の色を示さんに、若夫れ翠帳幔

く垂れて、蘭燈の影小暗き處、楚々たる姿は長火鉢にくの字なり、もしあなたやこ呼ばれんには、女嫌ひのしようべんはうえる、さてはにいちえも基督も、たゞあいよ〳〵と宣ふべしこそ。

武田櫻桃

自から卷尾に題す

我が祖父信立軒孤雀翁善助大人、今年七十一の高齢に達して益〻鍛鑠たり、弱冠にして京都に遊び、六角堂池坊に師事して華道に通じ、道詣殊に深し。兼ねて書に巧にして、俳句を善くす、不肖なるわれをして、文を學ばしめたるは、實に大人の致す所なり、往年われ大學に遊びしとき、『三百里つぎ句集』なるものを企て、書信にかふるに句を以てせしことありしが、をりふし、都は櫻時の賑ひなりしに、大人『なかりけり外に最一とつ吉野山』とありければ、われ『櫻見や大さまさまの心から』の答句をなしゝことありき、今はた昔の物語となりけるを、頃は大人上京して當時を語り、互に呵々大笑せしついでに、われに勸めてこの文を成さしむ、乃ち命を奉じて、夜を徹することと三夜にして稿を了る、大人之を讀みてまた大に笑ふ、而して終に句

なしわれ亦默して之を剞劂に附し以恩德鴻大なる孤雀翁の膝下に、この書を呈するをば世の人々のいかにとか見るらむおなかしこ。

明治三十五年初秋

竹風醉人

明治三十五年九月二十日印刷
明治三十五年九月廿七日發行

賣價四拾錢
郵稅六錢

著作者　東京市赤阪區檜町三番地　登張信一郎

發行者　東京市日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地　伊藤時

印刷者　東京市小石川區久堅町百〇八番地　水谷景長

印刷所　東京市小石川區久堅町百〇八番地　合資會社博進社工場

發行元　東京日本橋區大傳馬町二丁目廿一番地　文友館

著作權所有

92
312

山菅

星野天知氏著

一條成美氏畫

曾て文壇を愕かしたる一新思想「文學界」といふもの在りしを忘れ給ふまじ、此の牛耳を取りたる斯道の一驍將天知翁の在りしをも知り給ふべし、吾れ此程天知先生の文房を叩きて此の「やますげ」一卷を得たり、先生曰くこれは戀のすねもの破蓮坊が一代の風流談なりと、取りて見るにその嬌麗薄紫の袖の香床しきあれば悟りて悟らぬ濃艶こむらきの一くねりあり、其美術家の惑ひと狂ひの二趣向の如き作家の機微を捉えたるあり、忽にして世路の修行を語り忽にして人世の狂態を罵る、もし夫れ心の眞に二世の緣を謠ひ、怪しき他生の戀を述ぶるに至つては、これや盛春の風流なるべし、其文體の高雅優艶なる洒脫輕妙なる、更に江戸辯の世話物に至りては思ふに江戸生粹の意氣あるべし。

文友館主人述

文友館藏版　發賣所　東京神田表神保町　東京堂

全一冊價參拾八錢郵稅四錢

97

92
312

92
312

092813-000-4

92-312

あらひ髪

登張　竹風／著

M35
DBQ-0102